

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第12回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧	2
2013年度中国日本商会役員名簿.....	3
2013年度社会貢献委員会委員名簿	5
2013年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿	6
郭寧団長挨拶	7
主催、共催団体の概要	8
第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団 団員名簿.....	9
第12回訪日 ホームステイ受け入れリスト	10
第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程	11
第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト	12
< 訪日記録 >	
島津製作所(5/27)/担当:清華大学	16
京都大学(5/27)/担当:中国人民大学.....	18
静岡県農林技術研究所、農林大学(5/29)/担当:中国農業大学	22
ハウス食品(静岡工場)(5/29)/担当:對外經濟貿易大学.....	25
テルモメディカルプラネックス(5/30)/担当:北京外国語大学.....	28
住友商事(5/30)/担当:北京郵電大学.....	32
三井化学(5/31)/担当:清華大学	34
新日鐵住金(5/31)/担当:中国人民大学.....	36
みずほコーポレート銀行(6/3)/担当:中国農業大学	39
早稲田大学(6/3)/担当:對外經濟貿易大学.....	42
日比谷松本楼(6/4)/担当:北京外国語大学.....	46
東京新江東清掃工場(6/5)/担当:北京郵電大学	49
ホテルニューオータニ(6/6)/担当:清華大学	51
学生たちの感想文から	53
学生たちの撮った写真	74

第12回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、中国日本商会会員の総力を結集し、関係各位のご協力を得て実現した「走近日企・感受日本」事業の第2弾第2回訪日団の報告書です。

第1弾は2007年から2012年まで、合計10回、中国大学生からなる訪日視察団を派遣し、28大学294名が参加しました。日本商会は、第1弾終了後も、引き続き未来の中国を担う若い世代である大学生に日本および日本企業を知ってもらうことが大切であるという総意の下、第2弾の実施を決議し、3年間で6回、計210名の学生を派遣するために、会員から新たに1億5千万円の寄付を募り実施の運びとなりました。

通算で第12回目となる今回は、清華大学、中国農業大学、中国人民大学、對外經濟貿易大学、北京外国語大学に、中日友好ボランティア枠として北京郵電大学を加えた6大学から合計35名を選抜して2013年5月26日から6月6日までの12日間、日本に派遣しました。また、5月21日に開催された壮行会には、第11回訪日団に参加した学生も参加し、交流の輪が広がりました。昨年9月以降日中関係が厳しい状況となりましたが、このような時期だからこそ、これまで以上に両国国民の相互理解を深める必要があると存じます。特に中国の若者と意見交換や意思疎通をしたいという日本人がたくさんおり、12日間の行程が成功裏に終了したことを心から喜んでおります。

視察企業は、島津製作所(京都)、ハウス食品静岡工場(静岡)、テルモメディカルプラネックス(神奈川)、住友商事(東京)、三井化学市原工場(千葉)、新日鐵住金君津製鉄所(千葉)、みずほコーポレート銀行(東京)、ニューオータニホテル(東京)の8社。その他、静岡県農林技術研究所、農林大学、中国大使館訪問、新江東清掃工場、日比谷松本楼の見学、日本の大学生(京都大学、早稲田大学)との交流、日本のソフトパワーの代表例である「三鷹の森ジブリ美術館」の見学、一泊二日のホームステイ体験など多岐にわたるプログラムが組み込まれています。ホームステイ受入に協力いただいた企業は15社(アルプス電気、伊藤忠商事、島津製作所、新日鐵住金、住友商事、全日空、テルモ、トヨタ自動車、日本航空、丸紅、みずほコーポレート銀行、三井化学、三井物産、三菱商事、三菱東京UFJ銀行)にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の協力によって実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会にも全面的な協力をいただいております。訪日団の日本受け入れ、本報告書の編集にあたっては、一般財団法人日中経済協会にご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理は、中国側では中国友好和平発展基金会、日本側では公益社団法人企業市民協議会(CBCC)にご協力をいただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

中国日本商会 会長 松井俊一

2013年6月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠(中国)集団有限公司
3	新日鐵住金株式会社
4	住友商事(中国)有限公司
5	全日本空輸株式会社
6	東芝(中国)有限公司
7	トヨタ自動車(中国)投資有限公司
8	日本航空株式会社
9	日立(中国)有限公司
10	丸紅株式会社 丸紅(中国)有限公司
11	株式会社みずほコーポレート銀行
12	三井物産株式会社
13	三菱商事株式会社
14	三菱電機(中国)有限公司
15	三菱東京UFJ銀行(中国)有限公司

【寄付金】350万円以上～750万円未満

1	日本電気株式会社
2	キヤノン(中国)有限公司
3	住友化学投資(中国)有限公司
4	ソニー(中国)有限公司
5	三井住友銀行(中国)有限公司

【寄付金】100万円以上～350万円未満

1	あいおいニッセイ同和損保株式会社
2	旭化成株式会社
3	旭硝子(中国)投資有限公司
4	アルプス(中国)有限公司
5	岩谷産業株式会社
6	日本たばこ産業株式会社
7	日本郵船株式会社
8	NTTグループ
9	JTB新紀元国際旅行社有限公司
10	JX日鉱日石エネルギー株式会社
11	双日株式会社
12	第一生命株式会社
13	株式会社電通
14	東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険(中国)有限公司
15	日揮株式会社
16	日産(中国)投資有限公司
17	野村證券株式会社
18	三井化学株式会社
19	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険(中国)有限公司
20	三井住友信託銀行
21	三菱ケミカルホールディングス株式会社
22	三菱重工業(中国)有限公司

【寄付金】10万円以上～100万円未満

1	株式会社IHI
2	アルパイン(中国)有限公司
3	株式会社荏原製作所
4	エプソン(中国)有限公司
5	華昇富士達電梯有限公司
6	住金物産株式会社
7	住友生命保険相互会社
8	ソニー生命保険株式会社
9	大和証券株式会社
10	宝酒造株式会社
11	電源開発株式会社
12	東工物産貿易有限公司
13	東曹達(上海)貿易有限公司
14	トヨタモーターファイナンスチャイナ
15	日本生命保険相互会社
16	テルモ(中国)投資有限公司
17	日本農林中央金庫有限公司
18	ハウス食品株式会社
19	日立高新技术(上海)国際貿易有限公司
20	株式会社ブリヂストン
21	北京丘比食品有限公司
22	三井不動産諮詢(北京)有限公司
23	三菱マテリアル株式会社
24	三菱UFJ証券有限公司
25	三菱UFJ信託銀行
26	明治安田生命保険相互会社
27	明宝工程塑料商貿(上海)有限公司
28	矢崎(中国)投資有限公司
29	理光軟件研究所(北京)有限公司
30	株式会社ワコールホールディングス
31	成川 育代(個人会員)
32	柳田 洋(個人会員)

2013年度中国日本商会役員一覧

2013年6月度現在

	商会役職	氏 名	会社名	役職
1	会長	松井 俊一	三菱商事	常務執行役員 東アジア統括
2	副会長	杉浦 康誉	アサヒグループホールディングス	執行役員 中国総代表
3	副会長	小関 秀一	伊藤忠	常務執行役員 東アジア総代表
4	副会長	木戸脇 雅生	NEC(中国)	執行役員 中国総代表 董事長
5	副会長	小澤 秀樹	キヤノン	常務取締役 董事長
6	副会長	白須 達朗	新日鐵住金	常務執行役員 中国総代表 北京事務所長
7	副会長	幸 伸彦	住友商事	常務執行役員 東アジア総代表
8	副会長	稲田 健也	全日本空輸	上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長
9	副会長	金澤 恵二	トヨタ自動車	北京事務所 首席代表
10	副会長	田村 暁彦	日中経済協会	北京事務所 所長
11	副会長	酒匂 崇示	日本貿易振興機構	北京事務所 所長
12	副会長	大澤 英俊	パナソニックチャイナ	常務役員 中国・北東アジア総代表
13	副会長	北山 隆一	日立(中国)	執行役常務 中国総代表
14	副会長	矢部 勝久	丸紅	執行役員 中国総代表
15	副会長	宮口 丈人	みずほコーポレート銀行(中国)	董事長
16	副会長	澤田 眞治郎	三井物産	執行役員 中国総代表
17	副会長	柳岡 広和	三菱東京UFJ銀行(中国)	董事長
18	理事	高橋 修	岩谷産業	常務執行役員 中国総代表
19	理事	大野 滋	双日	執行役員 中国総代表
20	理事	近藤 隆弘	豊田通商	執行役員 中国総代表
21	理事	菊池 哲	阪和興業	理事 中国副総代表華北担当兼北京所長兼大連所長
22	理事	荒川 英典	住金物産	北京事務所大連事務所 所長
23	理事	吉家 義人	IHI	北京事務所 所長
24	理事	新保 貴史	旭硝子(中国)投資	執行役員 中国総代表
25	理事	佐藤 純也	NTTファシリティーズ	総経理
26	理事	武川 昌俊	JX日鉱日石エネルギー	常務執行役員 中国総代表 北京事務所長
27	理事	濱田 大輔	水翼(中国)環境工程	執行董事 経営企画部長
28	理事	片平 猛	電源開発	常務執行役員・中国総代表
29	理事	松岡 豊人	東京電力	北京代表処 首席代表
30	理事	勾坂 行男	アルプス(中国)	総経理
31	理事	稲葉 雅人	NTT	理事 中国総代表
32	理事	神田 文男	NTTデータ(中国)	中国総代表・董事長
33	理事	堂園 憲治	NTT通信系統(中国)	北京分公司 総経理
34	理事	今村 浩	NTTドコモ	北京事務所 所長

35	理事	渡辺 信博	京セラ	北京代表処 首席代表
36	理事	久保田 陽	ソニー	業務執行役員EVP／中国総代表
37	理事	桐山 輝夫	東芝	執行役常務 中国総代表
38	理事	北野 滋	富士通(中国)	総経理
39	理事	庄司 周平	マルチメディア振興センター	北京代表処 首席代表
40	理事	久木田 崇彰	三菱電機	中国総代表
41	理事	西山 寛	アステラス製薬(中国)	総経理 特別顧問
42	理事	北澤 伸幸	伊藤喜商貿(上海)	北京分公司 総経理
43	理事	中嶋 孝	王子ホールディングス	参与 中国事業本部本部長 北京事務所所長
44	理事	石舘 周三	資生堂(中国)研究開発中心	董事 総経理
45	理事	西 広信	住友化学投資(中国)	総経理
46	理事	野木 孝樹	大日本印刷	北京代表処 首席代表
47	理事	陳 偉東	中外製薬	北京事務所 首席代表
48	理事	三村 孝仁	テルモ	専務執行役員
49	理事	寺師 啓	東レ	北京事務所 所長
50	理事	得丸 洋	三井化学	社長補佐(専務執行役員待遇) 中国総代表
51	理事	瀬川 拓	三菱ケミカルホールディングス	執行役員
52	理事	大谷 昌弘	住友生命	北京代表処 首席代表
53	理事	渋谷 慎志	大和証券	北京代表処 首席代表
54	理事	福本 智之	日本銀行	北京事務所 首席代表
55	理事	平山 勝英	農林中央金庫	北京代表処 首席代表
56	理事	水谷 彰伸	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
57	理事	今川 真一郎	三井住友銀行(中国)	北京支店長
58	理事	須藤 信也	日通国際物流(中国)	董事社長
59	理事	江利川 宗光	日本航空	執行役員 中国総代表 北京支店長
60	理事	永井 圭造	日本郵船	経営委員 中国総代表
61	理事	三枝 富博	イトーヨーカ堂	常務執行役員 中国総代表
62	理事	山崎 道德	JTB CHINA	執行役員 中国総代表
63	理事	飯島 茂	全日空国際旅行社	総経理
64	理事	宮本 賢治	長富宮中心	総支配人
65	理事	久島 伸昭	電通	北京事務所 総代表
66	理事	松田 良次	北京発展大厦	董事 総経理
67	理事	田淵 真次	日中経済貿易センター	専務理事 北京事務所所長
68	理事	中下 裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所 中国総代表
69	理事	勝又 賢一	北京日立華勝信息系統	総経理
70	理事	越智 博通	北京陸通印刷	董事長
71	理事	青木 重人	三井不動産諮詢(北京)	董事 総経理
72	理事	稲垣 正実	アサツーディ・ケイ	北京事務所 所長
73	理事	三谷 達巳	北京キューピー食品	総経理
74	監事	原井 武志	監査法人トーマツ	パートナー
75	監事	菊池 洋	国際協力銀行	首席代表

2013年度社会貢献委員会委員名簿

	氏 名 （会社名・役職）
社会貢献委員長	幸 伸彦 （住友商事 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	松井 俊一 （三菱商事 常務執行役員 東アジア統括）
委員	杉浦 康誉 （アサヒグループホールディングス 執行役員 中国総代表）
委員	小関 秀一 （伊藤忠 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	木戸脇 雅生 （NEC 執行役員 中国総代表 董事長）
委員	小澤 秀樹 （キヤノン 常務取締役 董事長）
委員	白須 達朗 （新日鐵住金 常務執行役員 中国総代表 北京事務所長）
委員	稲田 健也 （全日本空輸 上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長）
委員	金澤 恵二 （トヨタ自動車 北京事務所 首席代表）
委員	田村 暁彦 （日中経済協会 北京事務所 所長）
委員	酒匂 崇示 （日本貿易振興機構 北京事務所 所長）
委員	大澤 英俊 （パナソニック 常務役員 中国・北東アジア総代表）
委員	北山 隆一 （日立 執行役常務 中国総代表）
委員	矢部 勝久 （丸紅 執行役員 中国総代表）
委員	宮口 丈人 （みずほコーポレート銀行(中国) 董事長）
委員	澤田 眞治郎 （三井物産 執行役員 中国総代表）
委員	柳岡 広和 （三菱東京UFJ銀行(中国) 董事長）
委員	江利川 宗光 （日本航空 執行役員 中国総代表 北京支店長）
委員	黒主 忠夫 （交通公社新紀元国際旅行社 董事 総経理 ）

2013年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	幸 伸彦	住友商事株式会社 常務執行役員 東アジア総代表
【WG座長】	田村 暁彦	日中経済協会 所長
アサヒグループホールディングス(株)	飯塚 喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集团有限公司	石津 顕太郎	中国人事・総務部
キヤノン(中国)有限公司	柴丸 茂	Vice President
新日鐵住金(株) 北京事務所	長南 隆	代表
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	黒主 忠夫	董事 総経理
住友商事(中国)有限公司	畑田 好朗	中国総代表付
	米 健	総代表付
全日本空輸株式会社	満田 栄一郎	銷售部 高級経理
東芝(中国)有限公司	東口 雄一郎	総裁室 室長
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田 弘毅	渉外部主査
(財)日中経済協会	高見澤 学	所長代理
日本航空株式会社	上り浜 健一	北京支店販売部総経理
日本貿易振興機構 北京センター	島田 英樹	進出企業支援センター センター長
日立(中国)有限公司	宮田 剛志	信息資源本部 公共関係部 副総経理
丸紅(株) 北京事務所	稲積 和典	総代表助理
みずほコーポレート銀行(中国) 北京支店	西村 浩二	総務課 課長
三井物産(株) 北京事務所	菊地 健太郎	中国総代表室 室長助理
三菱商事(中国)商業有限公司	李 征	企画発展部 経理
三菱電機(中国)有限公司	原 正英	副総経理
三菱東京UFJ銀行(中国) 北京支店	峯田 陽一	支店長代理
【オブザーバー】	名子 学	日本大使館 広報文化センター 一等書記官
【オブザーバー】	山田 佑	日本大使館 経済部 三等書記官
【訪日中のアテンド等】	関 誠	日中経済協会 (東京) 理事

第12回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团報告書 団長挨拶

第12回「走近日企・感受日本」中国大学生代表团一行40名は、中国日本商会のお招きを受け、5月26日から6月6日にかけて東京、京都、浜松等の地を訪問いたしました。日中経済協会及び各関連企業や大学のお力添えを頂き、私達は充実した楽しい12日間を過ごすことができました。ここに心より感謝申し上げます。

日本での滞在期間中、私達は島津製作所、ハウス食品静岡工場、テルモメディカルプラネックス、住友商事、三井化学、新日鐵住金君津製鉄所、みずほコーポレート銀行等の企業を訪問、そして静岡県農林技術研究所やホテルニューオータニの環境保護施設を見学し、更には中華人民共和国駐日本国大使館を表敬訪問いたしました。代表团一行はまた、京都大学や早稲田大学の学生や教員と交流を図り、週末を利用して日本の一般家庭にホームステイをし、日本人の生活を身近に体験いたしました。中国の学生も文字通りの「走近日企・感受日本」を実践し、中国人に対する日本人の温かい友情の念を感じることができました。

今回の訪問を通し、学生達は見識を増やし、視野を広げ、日本の経済や社会の発展状況について理解を深めただけでなく、お互いの友好も深めることができました。彼らは、今回の日本訪問を通して見て聞いて感じたことを心を込めて綴っています。皆様はこの報告書から、中国人学生の日本の皆様への思いを感じて頂くことができると思います。

今年は中日和平友好条約（日中平和友好条約）締結35周年にあたります。「国の交わりは民の相親しむに在り」とも言われますが、民間の友好交流こそが中日友好の基盤であり、今後も引き続き中日両国の民間友好交流を推進していくと同時に、中日青少年の友好交流活動に力を入れ、中日友好に貢献できるより多くの若い力を育み、両国の若い力を以って共に中日両国の末永い友好関係の構築を目指して参る所存でございます。中日友好協会は日本の各友好団体と共に、民間の友好の力によって民が官を後押しし、中日関係が正しい軌道に沿い安定的に発展するよう努力を続けて参ります。

最後に、この度の代表団の日本訪問に際し多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会ならびに中日両国各界の支持者の皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

第12回中国大学生訪日代表团 団長 郭寧

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2013年5月末日現在、市内法人会員643社、市外法人会員56社、個人会員22名、賛助会員8名の合計729社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同发展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓 名	性別	所 属		専 攻
団 長	郭寧	女	中国日本友好協会	都市・経済交流部部長	
団 員	李健	男	清華大学	熱エネルギー工程系	エネルギー動力システム・自動化
団 員	劉丹暘	女	清華大学	熱エネルギー工程系	エネルギー動力システム・自動化
団 員	饒聰	男	清華大学	熱エネルギー工程系	エネルギー動力システム・自動化
団 員	楊月	女	清華大学	工程物理系	工程物理
団 員	楊思謙	女	清華大学	工程物理系	工程物理
団 員	劉天楽	男	清華大学	工程物理系	エネルギー実験班
団 員	趙未央	男	中国農業大学	食品科学・栄養工程学院	葡萄・葡萄酒工程
団 員	聶車暢	女	中国農業大学	動物科学技術学院	動物科学
団 員	凌晨	男	中国農業大学	生物学院	生物科学
団 員	王珏	女	中国農業大学	経済管理学院	農林経済管理
団 員	費書朗	女	中国農業大学	農学・生物技術学院	農学
団 員	顧燁	男	中国農業大学	農学・生物技術学院	植物生産
団 員	江天雨	女	中国人民大学	国際関係学院	政治学・行政学
団 員	何思源	男	中国人民大学	理学院	化学
団 員	趙曉晴	女	中国人民大学	新聞学院	ニュース学
団 員	楊暢	女	中国人民大学	新聞学院	マスメディア学
団 員	趙歆悦	女	中国人民大学	信息学院〔経済学院〕	数学・応用数学〔国際経済・貿易〕
団 員	陳樊駿	男	中国人民大学	信息学院	コンピュータ科学・技術、情報管理・情報システム
団 員	馬博釩	男	對外経済貿易大学	外語学院日語系	日本語
団 員	李家聖	男	對外経済貿易大学	外語学院日語系	日本語
団 員	陳亦行	女	對外経済貿易大学	国際経済貿易学院	金融学
団 員	李佳玉	女	對外経済貿易大学	国際経済貿易学院経済学類	国際経済・貿易
団 員	蒙宛璐	女	對外経済貿易大学	国際経済貿易学院	金融学
団 員	邱歆与	女	對外経済貿易大学	国際経済貿易学院	国際経済・貿易
団 員	潘璟	女	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団 員	関夢露	女	北京外国語大学	日語系	日本語文学
団 員	徐晨琛	男	北京外国語大学	日語系	日本語
団 員	錢童	女	北京外国語大学	日語系	日本語
団 員	鄧沛捷	男	北京外国語大学	日語系	日本語
団 員	張田	女	北京外国語大学	日語系	日本語
団 員	楊寧	女	北京郵電大学	自動化	物流工程
団 員	賈晨宇	男	北京郵電大学	電子工程学院	電子情報科学
団 員	陳羽翔	男	北京郵電大学	計算機	コンピュータ科学・技術
団 員	胡承蓉	女	北京郵電大学	経済管理学院	工程管理
団 員	趙子蔚	女	北京郵電大学	国際学院	電子ビジネス・法律
団員(引率教員)	王路芳	男	中国人民大学	国際交流処科長	
団員(引率教員)	林涵	女	中国農業大学	学生処副処長	
団員(事務局)	潘林	女	中国日本友好協会	友好交流部幹部	
団員(事務局)	劉夢妍	女	中国日本友好協会	都市・経済交流部幹部	

第12回訪日団 ホームステイ受け入れリスト

学 生				受 け 入 れ 家 庭	
所属大学	姓 名	性別	言語	所属企業	姓 名
清華大学	李健	男	英	新日鐵住金	日下部隆
清華大学	劉丹暘	女	英	住友商事	奥谷直也
清華大学	饒聡	男	英	住友商事	川崎真生
清華大学	楊月	女	英	みずほコーポレート銀行	沢松知慧
清華大学	楊思謙	女	英	島津製作所	高畑太朗
清華大学	劉天楽	男	英	テルモ	森新太郎
中国農業大学	趙未央	男	英	三菱東京UFJ銀行	北山雅一
中国農業大学	聶車暢	女	英	住友商事	須藤龍也
中国農業大学	凌晨	男	英	伊藤忠	酒井為徳
中国農業大学	王珏	女	英	全日空	田中穂積
中国農業大学	費書朗	女	英	三井物産	廣井美絵
中国農業大学	顧燁	男	英	三井化学	山崎真
中国人民大学	江天雨	女	英	全日空	志村まい
中国人民大学	何思源	男	英	三井化学	山崎真
中国人民大学	趙曉晴	女	英	テルモ	西山佳夫
中国人民大学	楊暢	女	英	全日空	北優子
中国人民大学	趙歆悦	女	英	三井物産	高橋進
中国人民大学	陳樊駿	男	英	三井化学	山崎真
対外経済貿易大学	馬博釗	男	日	三菱商事	菅納ひろむ
対外経済貿易大学	李家聖	男	日	三井化学	山崎真
対外経済貿易大学	陳亦行	女	日	アルプス電気	富田真司
対外経済貿易大学	李佳玉	女	日	新日鐵住金	澄川雅史
対外経済貿易大学	蒙宛璐	女	日	新日鐵住金	金清優子
対外経済貿易大学	邱歆与	女	日	新日鐵住金	國安信昭
北京外国語大学	潘璟	女	日	みずほコーポレート銀行	沢松知慧
北京外国語大学	関夢露	女	日	丸紅	重山直美
北京外国語大学	徐晨琛	男	日	日本航空	青木隆明
北京外国語大学	錢童	女	日	新日鐵住金	池田禎尚
北京外国語大学	鄧沛捷	男	日	伊藤忠	安登玲子
北京外国語大学	張田	女	日	トヨタ自動車	山本修己
北京郵電大学	楊寧	女	英	島津製作所	福島宏郎
北京郵電大学	賈晨宇	男	英	全日空	村河和徳
北京郵電大学	陳羽翔	男	日	全日空	川上友美
北京郵電大学	胡承蓉	女	英	テルモ	三井邦生
北京郵電大学	趙子蔚	女	英	新日鐵住金	藤森剛

第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日 付	日 程	宿 泊
1	5/26 (日)	14:35 北京首都国際空港発(NH160便) 18:20 関西国際空港着(定刻) 関空にて夕食後、バスにて京都のホテルへ	京都 リーガロイヤルホテル京都
2	5/27 (月)	09:30～12:30 ● <u>企業訪問①(関西・京都地区) 島津製作所</u> (昼食:島津製作所) 13:30～19:30 ◎ <u>大学交流① 京都大学</u>	京都 リーガロイヤルホテル京都
3	5/28 (火)	08:30～17:30 ★ <u>ソフト文化等視察① 京都市内見学</u> 嵐山(周恩来記念碑)、金閣寺、清水寺、高台寺茶道体験 及び座禅体験等) 夕刻: 浜松へ移動(新幹線利用) 京都発 17:56→浜松着 19:06(ひかり478) バスにてホテルへ	浜松市内 ホテルコンコルド 浜松
4	5/29 (水)	08:50～11:30 ○ <u>農業視察(磐田) (静岡県農林技術研究所・農林 大学校との交流)</u> (昼食:磐田グランドホテル) 13:30～15:30 ● <u>企業訪問②(中部・袋井) ハウス食品 静岡工場</u> バスにて、箱根湯本へ ★ <u>ソフト文化等視察② 箱根温泉(日本旅館、温泉文化 体験)</u>	箱根湯本温泉 ホテル天成園
5	5/30 (木)	10:00～13:15 ● <u>企業訪問③(関東地区) テルモMedical Pranex</u> (昼食:テルモ) 15:15～19:30 ● <u>企業訪問④(関東地区) 住友商事</u> (夕食:住友商事にて懇親会)	東京都内 ホテルニューオー タニ
6	5/31 (金)	10:15～12:30 ● <u>企業訪問⑤(関東地区) 三井化学 市原工場</u> (昼食:三井化学) 14:30～16:30 ● <u>企業訪問⑥(関東地区) 新日鐵住金君津製鉄所</u> (夕食:「カルネステーション銀座」)	東京都内 ホテルニューオー タニ
7	6/1 (土)	終日 ホームステイ	ホームステイ
8	6/2 (日)	夕方までホームステイ 16:00 ホテルで再集合、秋葉原にてショッピングと自由夕食	東京都内 ホテルニューオー タニ
9	6/3 (月)	09:00～12:00 ● <u>企業訪問⑦(みずほコーポレート銀行)</u> (昼食:みずほコーポレート銀行) 14:00～19:30 ◎ <u>大学交流② 早稲田大学</u>	東京都内 ホテルニューオー タニ
10	6/4 (火)	09:30～11:30 ● <u>中国大使館訪問</u> 12:00～13:30 ★ <u>ソフト文化等視察③ 日比谷松本楼 講話</u> (孫文と梅屋庄吉との交流) 14:30～20:30 東京ディズニーランド見学	東京都内 ホテルニューオー タニ
11	6/5 (水)	09:15～11:15 ★ <u>ソフト文化等視察④ 新江東清掃工場</u> (昼食:お台場「太陽楼」) 13:30～15:30 ★ <u>ソフト文化等視察⑤ 三鷹の森ジブリ美術館</u> (夕食:品川プリンスホテル「孫悟空」)	東京都内 ホテルニューオー タニ
12	6/6 (木)	09:00～10:15 ● <u>企業訪問⑧ホテルニューオータニエコセンター</u> 12:00～13:45 <u>歓送会(中国日本商会・日中経済協会主催)</u> 14:00 ホテル発、バスにて成田空港(T1)へ 17:25 成田国際空港発(NH955便) 20:35 北京首都国際空港着 到着後解散	

第12回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. 株式会社島津製作所 創業記念資料館・三条本社工場（5月27日）

井上 統雄	経営戦略室	中国管理	部長
西田 悟	海外事業開発部	企画管理課	課長
山下 和子	海外事業開発部	企画管理課	
杜淑英	海外事業開発部	企画管理課	
山崎 仁美	海外事業開発部	企画管理課	

2. 京都大学（5月27日）

赤松 明彦	理事・副学長(学生・図書館担当)	
西阪 昇	理事・副学長(財務・施設・環境安全保健担当)	
森 真理子	国際交流センター長	教授
家本 太郎	国際交流センター	准教授
河上志貴子	国際交流センター	准教授
パリハワダナ ルチラ	国際交流センター	教授
韓立友	国際交流推進機構	特任准教授
川口 泰史	研究国際部	部長
植村 正樹	研究国際部	留学生課 課長
飛田 清隆	研究国際部	留学生課 課長補佐
馬場 貴司	研究国際部	留学生課 課長補佐
魏舒林	研究国際部	留学生課 掛員

山下 晃正	京都府	副知事
村上 公伸	京都府	国際課 課長
藤本 善弘	京都府	国際課 副課長
八木 寿史	京都府	国際課 主査

斎藤 健一	ハイケム株式会社	
吉田 浄	公益財団法人日本科学技術振興財団	専務理事・事務局長

懇親交流会には京大生約40名が参加

3. 静岡県農林技術研究所・農林大学校（5月29日）

大塚 寿夫	静岡県農林技術研究所	所長
堀内 正美	静岡県農林技術研究所	研究統括監
市川 健	静岡県農林技術研究所	研究統括監
福島 勉	企画調整部	主査

安井 貢	静岡県立農林大学校	校長
川瀬 範毅	静岡県立農林大学校	技監兼教務課長
山崎 俊弘	静岡県立農林大学校	教務課研究班長
青島 洋一	静岡県立農林大学校	教務課 主幹
多田 克己	静岡県立農林大学校	教務課 主幹
勝岡 弘幸	静岡県立農林大学校	教務課 技師
佐藤 陽介	静岡県立農林大学校	教務課 技師
岡本 伸子	静岡県立農林大学校	教務課 講師

4. ハウス食品 静岡工場（5月29日）

平地 靖	静岡工場	次長
遠藤 秀	静岡工場	業務課長
川田 進司	静岡工場	品質課長
陳怡文	国際事業推進部	
神宮字 慎	国際事業推進部	国際事業規企画課長
鈴木 晶代	静岡工場	
佐々木あや子	静岡工場	
廣岡美由紀	静岡工場	

5. テルモメディカルプラネックス（5月30日）

三村 孝仁	中国総代表	取締役専務執行役員
西山 佳夫	国際部	中国事業グループ 部長
三井 邦生	テルモメディカルプラネックス	企画推進チーム 課長
藤田 規嗣	テルモメディカルプラネックス	企画推進チーム
金丸 知香	テルモメディカルプラネックス	企画推進チーム
中村 義博	テルモメディカルプラネックス	企画推進チーム
黒石 友哉	テルモメディカルプラネックス	企画推進チーム
日吉 勲	基盤医療器事業部	MEチーム 主任
鄺可書	研究開発センター	薬事登録グループ
李文龍	研開本部商品開発	血糖事業チーム
董舒林	国際部	中国事業グループ

6. 住友商事株式会社（5月30日）

阿部 康行	コーポレート・コーディネーション・グループ	取締役専務執行役員
武井 徹	コーポレート・コーディネーション・グループ	グループ長付
瀧本 忠	(株)住友商事総合研究所	社長
奥谷 直也	環境・CSR 部	部長
小野 徹夫	環境・CSR 部	社会貢献チーム長

岡 直子	環境・CSR 部	部長代理
菅谷百合子	環境・CSR 部	部員
遠山 悦子	環境・CSR 部	部員
小沢 承夢	環境・CSR 部	部員
小島 弘敬	地域総括部	副部長
伊崎 正人	地域総括部	東アジアチーム長
森川 麟三	地域総括部	部員
趙 涛	地域総括部	部員
坂入 俊輔	地域総括部	部員
亀田千可子	地域総括部	部員
彭 代子	環境エネルギー事業第一部	部員
張泓皓	ケーブルテレビ事業部	部員
王磊水	環境ソリューション事業部	部員
王建偉	石油化学品部	部員
佟来萍	特殊管事業部	部員
告旭平	住商グローバル・ロジスティクス(株)	中亜チーム
蔡文石	住商グローバル・ロジスティクス(株)	中亜チーム
段亜妮	住友商事マシネックス(株)	アジアビジネス部
何思穎	住友商事マシネックス(株)	アジアビジネス部

7. 三井化学株式会社 市原工場（5月31日）

小久江晴子	理事・CSR部長
今井 照彦	総務部長
宅明 謙吾	総務部総務グループリーダー
王 果	製造2部ポリエチレン2課

8. 新日鐵住金株式会社 君津製鉄所（5月31日）

佐藤 一郎	総務部長
常住 勉	広報センター長

9. みずほコーポレート銀行（6月3日）

菅野 暁	国際ユニット	常務執行役員
大門 栄城	中国営業推進部	部長
野口 雄裕	みずほ総合研究所(株)	市場調査部 シニアエコノミスト
宇都宮健彦	中国営業推進部	次長
高橋 康英	中国営業推進部	参事役
林 純和	中国営業推進部	調査役

姚 瑾 中国営業推進部 調査役
沢松 知慧 中国営業推進部

10. 早稲田大学（6月3日）

江正殷 国際部 東アジア部門長
白木 三秀 政治経済学術院 教授
楊 振 国際部国際課
中越 明子 国際部国際課
懇親交流会には白木ゼミの学生ら約40名が参加

11. 中国大使館（6月4日）

程永華 大使
汪 婉 友好交流部 参事官
趙 偉 政治部 一等書記官
孫永剛 友好交流部 一等書記官
孟素萍 友好交流部 一等書記官
王 麟 友好交流部 三等書記官

12. 日比谷松本楼（6月4日）

小坂 文乃 代表取締役副社長（梅屋庄吉曾孫）
長崎県関係者3名が同席

13. 東京都新江東清掃工場（6月5日）

本橋 勝照 管理課 業務係 係長
亀井 管理課 業務係
島田 紀行 東京23区清掃一部事務組合清掃事業国際協力室

14. ホテルニューオータニエコセンター（6月6日）

山本 正巳 ファシリティマネージメント課 マネージャー
三浦 光昌 ファシリティマネージメント課 係長
長嶋 慶一 グローバルマーケティング&セールス課 シニアセールスマネージャー

島津製作所

清華大学学生代表

見学日時：2013年5月27日（月） 09:30－12:30

見学場所：株式会社島津製作所 日本京都市中京区木屋町通二条南

見学概要

島津製作所は私たちが日本に来て見学した最初の企業で、同社は分析測定、環境モニタリング分野をリードする企業である。

島津製作所は1875年に創立され、日本で最初に医療用レントゲン機器と各種の分析機器を製造した有名ブランドである。第二代社長の島津源蔵氏はまた日本の有名な十大発明家の一人である。また同社は「科学技術で社会に貢献」を目標に、分析測定、環境モニタリング、試験検査測定、医療、航空宇宙、産業と環境エネルギーなどに関連する機器を生産し、同時に積極的に海外業務を展開し、北京、天津、蘇州に支社を設立している。島津製作所の現在の日本国内外グループ企業は約75社で、従業員数は約9,800人である。

私たちは先ず島津創業記念資料館を見学したが、係員の紹介によると、ここには常に小中学生が見学に訪れ、歴史を学ぶと同時に、また100年前の機械の知識を体験すると言う。私たちが興味を持ったのは、各種の顕微鏡と製造機器であったが、これらは非常に長い時代を経た「骨董品」みたいな存在だった。また、100年前に製造され、今なお依然として使用可能な扇風機を見て、私たちは日本人の几帳面さ、繊細さと優れた製造技術にとっても感心させられた。

資料館の見学の後、私たちは三条本社工場を訪れて同社の簡単な紹介を受けた。従業員との交流の中で、私たちは彼らが皆、島津製作所に対して非常に強い愛着を持っていることに気がついた。また「生体高分子の同定および構造解析のための手法の開発」でノーベル化学賞を受賞した同所の田中耕一氏は、彼らが尊敬の念を込めてよく口にする話題である。島津製作所は田中耕一氏のために「田中耕一記念質量分析研究所」を設立し、この日本で唯一の企業勤務の後にノーベル賞を受賞した研究者の今後の研究活動をサポートしている。先進的な各種医療器材、環境モニタリング装置、シンプルで軽量な定量分析モニタリング機器も、また大いに私たちの視野を広げてくれた。

知っていますか？



資料館の入り口の場所は、かつて創業時の建物が建てられていた位置で、島津製作所の出発点でもある。創業者である島津源蔵氏の生誕100周年を記念して、1938年にここに記念碑が建てられた。碑面に刻まれた「源遠流長」の四つの大きな文字は白居易の有名な故事に由来し、しかも拓本にとられているのは「島津家家譜」に書かれた文字である。悠久の歴史を示す四字熟語と同じく、創業から現在まですでに長い歴史を持つが、現在の同社首脳も、島津製作所の事業が今後も川の流れのように永続的に発展することを願っている。

島津源蔵氏について言及すると、私たちにはおそらく考え難い事だが、島津グループ初期の2代の社長がいずれもこの名前を名乗っている。初代社長が島津製作所を創立し、二代目社長は父の名前を受け継いだだけでなく、また父の事業と志も受け継ぎ、さらに発明分野でその父を超えた才能を発揮し、日本の十大発明家に並び称され、また医療用X線装置、バッテリーなどの新たな分野を開拓し、事業発展の基礎を固めたのである。

また現在の島津製作所が最も誇りとしているのは、日本で唯一の企業出身ノーベル賞受賞者である田中耕一氏を擁していることだ。田中氏の受賞技術成果「生体高分子の同定および構造解析のための手法の開発」は、聞くとところによれば偶然による発見であり、それは同氏が実験で試行錯誤をしていた時に、結果について総括し、最終的に新たな方法で得られた結果が意外に良いことに気づき、そこから更に総括を行い、最終的にこのノーベル賞級の研究成果が生まれたのだと言う。



感想

私たちが大学で学んでいる知識は島津製作所の研究分野とはかけ離れているため、島津製作所の医療器材及び研究成果について、実際はおそらく十分には理解できていないと思う。しかし私たちは同社の資料館と宣伝パンフレットから、島津製作所は製品の研究開発のみならず、多様な環境保護関連製品を通じて、社会に対する責任を全うしていることを知った。例えば、低炭素・排出削減の活動を積極的に展開、省エネ型製品の開発に尽力し、また従業員とその家族が一緒になって植樹活動に参加している。これらはいずれも環境保護活動の典型である。島津製作所はまた国連大学の環境保護プロジェクト支援を通じて社会的公益活動に参画し、島津賞助成金を設立して優秀な科学研究者及び科学研究プロジェクトを奨励し、小・中・高校生を対象とした地球環境に関する出前講座活動の展開、「島津ぶんせき体験スクール」の開催による人々の科学知識に対する興味の促進を図るなど自らの社会的責任を全うし、社会の発展に貢献している。これこそが日本企業と中国の多くの企業の違いであり、これらは私たちがその後に見学した多くの日本企業でいずれも実践されていた。彼らは往々にして利益を唯一の追求目標とはせず、自らの努力を通じて社会との真の共同発展を実現し、より良く向上するという企業文化を創り上げている。

百年以上の歴史を持つ企業が、現在も積極的に新たな分野を開拓し、しかもノーベル賞級の研究成果を生み出す、これは確かに予想を超えた事だが、中国で現在発展の苦境に直面している老舗企業が目指すべき方向ではないだろうか。ともあれ、旅程初日の収穫は非常に大きなものがあった。

京都大学への訪問

中国人民大学学生代表

見学日時：2013年5月27日（月） 13:30－19:30

見学場所：京都大学メインキャンパス



見学概要

中国大学生訪日団の日程2日目に、私たちは日本の名門大学——京都大学を訪れた。今回見学したのは京都大学のメインキャンパスで、経済学部、文学部、工学部などがある。京都大学は日本、そして世界でもトップレベルにある輝かしい名声を持つ最高学府の一つである。同校は高度な理性を基点とする「自由な学風」をうたっており、各学派の思想体系を重視し、先進的独創的な学問研究を推進し、社会の各分野でいずれもリーダー的役割を發揮している。

京大の最初の見学場所として私たちはまず同校の国際交流センターを訪れた。国際交流センター長は京大の歴史と沿革、同校の運営理念と各界のノーベル賞受賞者などを解説され、その中ではまた、かつて周恩来首相が若い頃京大に出願した興味深い話題にも言及された。

その後私たちは6つのグループに分かれ、京大の学生の引率でキャンパスを見学した。京大のキャンパスは京都の風情が満ちており、緑の木々と鮮やかな花々の間に古色蒼然とした建物を見る事ができる。また京大の校門の両側には学生たちの「学長打倒、首相打倒」の抗議横断幕がたくさん掲げられており、京大の自由で民主的なキャンパスの雰囲気垣間見ることができた。

キャンパスを見学した後に、両国の大学生は以下の6つのテーマについてグループ別討論を行った。テーマは、環境問題、エネルギー問題、東アジアの自由貿易システム、北京と京都の伝統文化、大学生の就職と国際結婚・恋愛である。その後会議室に戻り、グループ別討論の結果発表を行った。両国の大学生は多くの問題でいずれも似た考え方を持っていた。例えば恋愛と婚姻の問題では、中日両国の大学生はいずれも心からの相愛と性格の一致が金銭や物質よりも重要と考えていた。

最後に、両国の大学生が一堂に会して立食交流パーティーを行った。美食に舌鼓を打ちながら、心置きなく語り合い、学習、生活、恋愛などの多くの面で交流を図った。中国の大学生はまたステージに上がって、入念に準備した日本語の歌を披露した。

そして、皆が名残を惜しみながら別れを告げた。海に阻まれてはいるが、私たちはインターネットを通じ交流を続けることができる。この友情はずっと皆の心の中に残ることだろう。



知っていますか？

1. 京都大学はかつて日本で唯一の国立大学(すなわち東京大学)と競争するために、当時の西京(すなわち京都)に設立された大学で、東京大学と学術上での東西対峙という局面を形成した。
2. 京都大学の面積は大きくなく、自転車で学校の中を一周してもおそらく3～5分ほどである。キャンパスが大きいため、京大の3棟の寮のうちキャンパス内にあるのは1棟だけで、3棟の中で最も遠い寮は列車に1時間乗ってようやくキャンパスに到着できる。そのため、京大の大部分の学生は皆朝は家から通学するか、あるいは大学付近の民家に下宿している。
3. 京都大学の校訓は「自由な学風」で、キャンパスの各所にも自由な雰囲気がみなぎっている。京大は教育上では柔軟な管理原則により、全学でコース選択制を実施しており、京大の学生は学年問わず規定の履修単位を得れば卒業することができ、しかも履修単位は試験に限らず、論文やレポートの執筆でも取得することができる。その他に、京大は完全な言論の自由を掲げている。京大の学生は大学側の許可を経ることなくキャンパスの中に垂れ幕、立て看板を掲示することができ、いくつかの垂れ幕や立て看板には「学長打倒」の文字さえ書かれている。



感想

近代以来、中国の崇高な理想に燃える人々、若き俊才たちが東に向けて、私たちの一衣帯水の隣国である日本に渡り、国を滅亡から救うための活路を見出した。資本主義の発展過程において、中国と同じくアジア国家である日本は、かつて欧米世界の歩みに後れをとり、そして欧米資本主義諸国の絶え間無い脅威と抑圧を受けた。この学習に長けた、逞しい民族は他国の束縛に甘んじず、その中の有志が率先して、迫り来る圧力の下で苦境から逃げ出すことなく謙虚に学び、欧米の先進的な学説と技術を導入した。多くの欧米の学説が日本の学者や学校により翻訳され、そしてそれぞれの世代毎に留学に訪れる中国の青年に影響を及ぼし、中国が欧米の先進的な科学文化に触れ、理解する重要な中継地となった。

この過程の中で、日本の大学教育は当時の志を持って国に報いようとする中国の青年に非常に大きな啓蒙作用を発揮した。今日、京都大学は日本で最も有名な最高学府の一つとして、私たちのような、なお求学の過程にある青年たちに憧れの気持をもたらしている。京都府は日本の古都であり、いにしへの神社仏閣や優雅な伝統文化が、この静かで美しい都市の随所に見られ、この都市に更に濃厚な文化的色彩を添えている。京都大学がこのような文化的雰囲気の中に富んだ、古典的でなお優雅な都市の中に位置していることは、学術精神の薫陶と養成にとって、大いにプラスになっている。道すがら、私たちは京都の古都の美しい景観を鑑賞し、同時に京都大学への訪問がもたらす思考力の向上に内心期待していた。

京都大学に着くと、接待の日本の学生達はすでに建物の中に並んで私たちを迎えてくれた。この訪れて間もなく受けた歓迎に私たちの心は温かくなった。着席すると、先ず京都大学の先生が私たちに京都大学の歴史と基本的な状況について紹介して下さった。大学の発展概況を拝聴した時、ある一つの例が私たちにとても深い印象を残した。それは暗闇の条件下でショウジョウバエの視覚細胞が退化するか否かに関する実験で、これは非常に長い観察期間が実験成立のカギとなる条件であるため、数十年、更には百年の観察が必要であり、京都大学の幾世代もの研究者が先人に続いてその実験を引き継ぎ、粘り強い科学への精神、名利を求めない精神によって60年間実験を続けているというのだ。今日では実験を開始した当時の学生たちの中にはすでに故人となった人もいるが、実験は続いている。この例を聞いて私の心は敬慕の念でいっぱいになったが、それは研究者たちの真理に対する弛まぬ追求と、彼らの個人的利益への蔑視に対する敬慕である。それと同時に一種の無言の感動が私を揺り動かした。なぜならこのよ

うな精神はすでに学術精神をはるかに超えており、もし人々の真理に対する追求が生命における不可欠な渴望となれば、この追求は一本の松明となって、皆を真なる光明に導くことができるからである。しかもこのような長期間の実験は、一連の制度や文化の保障がなければならず、科学研究の法則、適切で合理的な評価体系に合致してこそ、研究者たちは本当の学術に集中することが保障され、生活のために忙しく走り回り、眼前の利益にかまける必要はなくなる。科学を尊重し、真理を熱望する文化的雰囲気があつてこそ、たとえ大きな犠牲を払ったとしても、研究者たちは心から科学を追求するようになる。しかもこれらを、京都大学は研究者と学生たちに与えることができる。私は、これも京都大学がこのような自由で、学術に厳格な学風を持った総合大学に成長した要因なのだろうと思う。

その後の京都大学の学生たちとの交流で、私たちはより一層この名門校の文化を体験することができた。学生は大学の最も重要な文化キャリアであり、京都大学の学生たちは親身な接待と、流暢な英語で私たちに日本の若い世代の積極性を見せてくれた。私たちは彼らと話し合いを始めると、違う国で生活してはいるが、私たちの間にはやはりスポーツ、音楽、漫画、書籍等々多くの共通の趣味があることに気付き、みんな初対面であるにも関わらず全く隔たりが無いかのようだった。お互いの違いもまた私たちの相互理解を促進し、踏み込んだ話し合いをするきっかけとなった。私たちは日本社会に対する好奇心から多くの問題を提起し、そして日本の学生たちはまた私たちに根気良く答えてくれた。私たちが西出実験室を見学した時は、西出先生が設計したロボットが立ったり座ったり、また私たちに手を振る仕草が訪問団の学生たちの大きな称賛を得るなど、私たちに科学技術の魅力を教えてくれた。

グループ別討論の中では、各グループの学生たちがそれぞれの特別テーマについて討論したが、これらのテーマは科学技術、文化、社会、環境などさまざまな方面に及び、私たちが各テーマについて交流する中で、中日の若者間の思考の疎通を実現できた。日本の学生たちは考えることに長け、思考は鋭敏で、しかも流暢な英語でそれを表現できる。この点には私たちが自らに対する要求をより高めなければならないと思った。この世界には多くの優秀な若者がいる。もし私たちが心を開き真心を込めて交流したなら、私たちは眼前の風景だけではなく、その彼方の更に無限の光景を感じることができるのである。このような感慨が私たちの心の中に満ち溢れただけでなく、更に立食パーティーの時の私たちの歌声にもその想いが込められていた。そうだ、このような若い時期に、この美しい国で、聡明で友好的な新たな友人たちと楽しく充実した日々を共に過ごし、芳醇な美酒を共に味わう、これ自体がすでに生命の意義を明らかに示す、記憶の中に不変の輝きを放つ一つの恒星なのだ。

私たちが夜風に吹かれその場を離れる際、心中の名残惜しさが幾度も私たちの歩みを引き留めた。私たちは絶えず手を振って別れの挨拶をし、将来必ずまた再会しようと互いに約束した。この時、時空を跨いだ友情が一筋の虹のように、未来に憧れる私たちの心の中で互いの友情が繋がりはじめた。さようなら、わが友人たち、さようなら、京都大学、私たちは永遠にこの日を記憶しておこう。私たちは美しい未来のために、共に努力を誓おうではないか。

さようなら！

心を込めて土を耕し、土で心を耕す——農業者の道

中国農業大学学生代表

見学日時：2013年5月29日（月） 09:00－11:30

見学場所：静岡県農林技術研究所及び農林大学校



見学概要

また今日も雨模様だったが、静岡県での農業見学に私たちの目の前が明るくなる思いがした。

私たち一行は、はじめに研究所のスタッフから、静岡県の農業の状況及び研究所の施設に関する説明を受けた。静岡県は日本の中部に位置し、面積は7,780km²、耕地面積は70,200ha、県全体に占める耕地面積の割合は9%である。静岡県の年平均気温は16-17℃、気候は温暖で、冬は乾燥しており、しかもほとんど雪は降らず、年平均降水量は1,800-2,500mmである。快適な気候条件と優れた農業技術によって、静岡県は茶葉、柑橘類、メロン、ワサビ、ガーベラ、イチゴなどの農産物の生産額が高い。そのうち茶葉は第一位で、年生産額は436億円、生産量は日本全国の半分を占めている。静岡県農林技術研究所は県立の研究所であり、温室などの先端技術を利用して、静岡県特有のお茶、野菜、くだもの、穀物などの品種改良を行い、病虫害対策及び新しい栽培方法などに関して研究を行っている。

概要紹介が終わった後、訪日団は2つのグループに分かれて、研究所スタッフの案内の下でメロンとガーベラを栽培している温室を見学して回った。温室ではほとんどが水耕栽培の培養液栽培技術が使われており、設備は完備され、いたる所にエコ理念が反映されていた。温室の中に多くの給水管が張り巡らされていることに気が付いたが、スタッフは、それは各季節ごとに温室内を最適温度で保つためのもので、現在3年目の試験段階に入っているが、メロンの温室栽培における最適温度を見つけることが目的だと説明してくれた。温室の中では、ほぼすべてに蒸気洗浄消毒法が使われ、農薬の使用量を最低限まで減らすことにより、作物の無公害化と環境への無汚染化を保証している。

温室の中にある多くの施設の設計は非常に効率的である。例えば温室の南側の天井は北側の天井より長めに作られており、日光が十分射し込むよう工夫がされている。また、温室内の作物の鉢は日光方向に階段状に並べられているが、これは光の屈折原理を利用して、一つ一つの鉢が十分光エネルギーを得るようにするためである。また各温

室の後方には、2-3個のファンが取り付けられているが、これは空気を攪拌し、温室内の気流を均等化することで、作物の生育に役立っている。スタッフの説明によると、温室内での温度測定、測光などの検査・測定設備の情報制御方法は2つあるようだ。一つは、すべての情報を一台のパソコンに送信して統一的に整理する方法であり、もう一つは、半自動式制御、つまり設備自体が即時に調整する方法である。

温室の見学を終えた後、農林大学校の見学を行った。農林大学校は、農業生産技能を有する農業従事者を育成し、家庭や国の農業事業に貢献する力となることを旨とする、専門の大学である。私たちは、まず大学一年生の野菜栄養学の授業を見学し、実践を基礎として理論知識を教授するという農林大学校の教育理念を体験し、また近い将来農業に携わるであろう学生たちの純朴さ、愛おしさを感じた。その後、大学二年生の花弁実習温室を見学した。ここでは農林大学校の学生の手助けを受けながら、ガーベラ摘みにチャレンジした。自分の手にした多彩なガーベラを見て、私たちの心の中は達成感で満ち溢れた。

最も印象深かったのは、耕土耕心(土を耕し心を耕す)という農林大学校の校訓である。一人の農大生として、この四つの文字にはより深い感慨を覚えた。しかし、実のところどんな仕事に就こうとも、こういう心がけは持つべきである。やるべきことはそのこと自身だけでなく、さらに自分の心の奥底に届かせることで心が寛くなり、品性がより高まるのである。



知っていますか？

Q：静岡県産メロンの価値は？

A：メロン一個2万円？そう、これは静岡県だけです。だから静岡メロンはハイエンド商品であり、一般の人は高く食べることができないのです。このメロンは形が丸く味は甘く、皮には非常に整然としたきれいな網目模様があるそうです。

Q：ガーベラの特徴として重要な点は？

A：静岡県のガーベラはヨーロッパの技術を使って栽培されていますが、ここで栽培されているガーベラは、主として優良品種の研究開発に応用されています。研究開発スタッフが重視しているガーベラの特徴は2つありますが、1つは大きさや色などの外観的特徴で、もう1つは花の観賞期限です。

Q：研究所の温室の屋根にあいた穴は何のために使われているのですか？

A：これらの穴を通して、温室内の気温を測るセンサーが外界の空気と触れることによって、正確な温度情報をモニタリングすることができます。



感想

静岡県立農林技術研究所と農林大学校の見学を通して、学ぶべきところが多かった。

全体的にみると、わが国と日本は、研究開発の内容においては、例えば優良品種の選抜育種、水耕栽培温室培養などのように、特に大きな差はない。しかし科学研究成果の応用や流通販売の面では、日本の方がより進んでいる。例えば、静岡県農林技術研究所は県立の研究所であるが、日本ではこういう研究所は一般農家と非常に緊密に連携している。そうすることによって、実際に国の農業生産を支えている一戸一戸の農家に、農業分野のハイテクノロジーをより速く、より広範囲に浸透させているのである。さらに例えば、研究所が開発したメロンは、外形が美しく、味が甘くておいしいので、研究開発者はそのメロンをハイエンド市場用と位置付け、富裕層向けに販売している。つまりこれは、それぞれの銘柄ごとにより具体的な販売ターゲットを持たせるということであり、流通や普及にプラスとなる。しかも、農産物の全国規模での流通という面でも、日本はうまく進めているが、これについては国の客観的情況と関係があり、わが国は土地が広大で人口が多く、貧富の格差が大きいなどの問題の制約を受けている。

農林大学校での授業参観を通して、日本の農業学校は学生の实践能力の育成を重視しているということを明確に感じた。私たちが見学した野菜栄養学の授業では、教師は、学生一人一人を野菜生産の経営者の立場から、野菜の播種期、成熟期などを学生自身に調整させることを通して、市場を確保し収益を得ることを学ばせていた。その後、学生たちの実践で得た成果を通して、授業に戻って学生たちに野菜の播種期、成熟期に関する知識を教えるのである。学生は一年生の時から農業分野において、自ら体験しそれを実行するというやり方で勉強し、常に理論を実践に移しているのが、経験を積んだ農業者により速くなれるに違いないと思った。続いて見学した花卉の摘み取り実習では、私たちは、2年生が実習服を着て、教師の指導が無いなかでも温室でそつなく作業をこなしているのを目にし、農作業を行う学生たちのモチベーションの高さを感じた。

今回の見学で最も強い印象を受けたのは、農林大学校の校訓である。まず目に留まったのは「農小強」と書かれた扁額である。それは、少し洒落ていて、かたくなな感じもした。農業という仕事に対して偏見を持っている人がよくいるが、それとは反対に、私たち一人一人の心の中は農業への希望で満ち溢れ、一方で自嘲しながら楽しい小農民として生き、一方では揺るぎない決意を持って歩みを進め成果を出していくのである。その後私たちは「耕土耕心」の石碑の前で記念写真を撮った。科学研究に携わる人間は、冷静な頭で真面目にコツコツと仕事に取り組む必要がある。そして私たち農業研究に携わる人間は三農（農業、農村、農民）に最も近い位置にいるため、より穏かな心持ちと真面目な研鑽の精神を持たなければならない。私たちは心を込めて土を耕し、土で心を耕してはじめて、農業分野に貢献をすることができ、また自分自身の価値や当初の夢を実現することができるのである。

地球に優しいハウス食品

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2013年5月29日（水）13:30－15:30

見学場所：ハウス食品静岡工場



見学概要

私たちはハウス食品のPR映像を通して、静岡工場が主にバーモントカレー(即席カレー)ととんがりコーン(おやつ菓子)の生産をしていることを知った。PR映像による工場の生産ラインの紹介に、私たちの工場見学への期待はより高まった。

- (1) バーモントカレー生産ライン見学。生産工程はおよそ7つのステップに分けられる。それぞれソースの製造、食材の準備、カレーのパック詰め、高温高压殺菌、包装の最終検査、電気自動車による運搬、出荷である。団員たちは三つのグループに別れ、ソースの製造と出荷以外の全ての生産工程を見学した。
- (2) 質疑応答。団員たちは工場の生産についての詳細、環境保護、PR面、社会的責任等について活発な質問を行った。



知っていますか？

(1) ハウス食品が伝えたい理念は？

安心安全の達成と同時に、省エネと循環利用という環境保護活動にも尽力し、地球に優しくという目標を達成することである。

(2) ハウス食品の廃品率5%未満の秘訣は？

原材料から完成品に至るまでの度重なる検査、特に完成品検査の際には、X線検査機を使用している。検査基準の厳格さは、パッケージの中で二つの肉の塊が重なってくっついている状態というだけで、このカレーは不合格品として選別され廃棄されるほどである。

(3) ハウスの人気度合いは？

ハウスの販売量は夏が一般的に冬より多い。なぜなら夏は食欲がなくなる人が多く、辛めのものが好まれるため、この時期ハウスのバーモントカレーは消費者のベストチョイスとなるからである。夏の時期、ハウスのカレーは一日で50万パック売れる。また、その安心安全の理念をより広くアピールするため、ハウスは年間8000人強の工場見学者を受け入れており、その中には多くの小中学生が含まれている。

(4) ハウスはいかに地球に優しくという目標を達成しているのか？

まず、ハウスはエコロジーな製品の生産に尽力している。例えば、飲料ボトルの軽量化やおやつ菓子パッケージの小型化などにより、ごみの量とCO₂の排出量を削減することができる。また例えば、生わさび製品のパッケージに切り込み線を入れ、ごみ処理しやすくする。次に生産の面において、ハウスは様々な方法を通してCO₂の排出量を削減しているほか、ガスを天然ガスに変更することで、窒素化合物の排出を削減しており、ごみ処理面でも焼却処理を減らす努力をしている。

感想

食品安全問題は、大変残念なことに中国で最近非常にホットな話題になっている。中国の食品安全問題は止まることを知らず、絶えず一般市民の許容限界が試されている状況である。ハウス食品の見学を終え、その高効率・安全性・環境保護理念に感慨を覚えると同時に、今現在日本人の誇りとなっている衛生的で安全な美味しい食品にも、



悲惨な歴史があったことに眼を向けなければならない。1955年に起こった「森永砒素ミルク」事件や1960年代の「地溝油」事件などである。中国が現在直面している状況は、正に日本の高度経済成長期に直面していた状況と非常に似ている。私たちは日本のこの悲惨な歴史からその経験を汲み取り、関連法規を強化し、一般市民の食品安全意識を高めなければならない。また同時にハウスのような優秀な企業が先頭に立ち、市民に対して食品の安全性を保障するなど、その他の食品会社の手本となることにより業界全体が高効率・安全性・環境保護理念を努力目標として追求していくことを牽引すべきであると思う。また中日の食品業界間の交流を強化し、互いに手を携えて共に食品の安全を保障していくことも必要である。そうすることで私は、中国の食品業界の未来はきっとより良くなると信じている。

より人に優しい医療衛生事業へ

北京外国語大学学生代表

見学日時：2013年5月30日（木） 10:00－13:15

見学場所：テルモ株式会社 神奈川県

見学概要

5月30日午前、「走近日企・感受日本」の我々訪日団一行は、テルモ株式会社のテルモメディカルプラネックス(テルモ総合医療トレーニングセンター)を訪れた。見学に先立って開かれた簡単な説明会で、我々はテルモ株式会社と世界に一つしかないこのトレーニングセンターについて一定の理解ができた。



テルモ株式会社は1921年に設立され、取扱商品は使い捨ての医療用機器、輸血用器具、医薬品類や栄養補助食品、血管造影および治療用ガイドワイヤー、医療用電子機器、人工心肺関連製品など幅広いラインナップを取り揃えており、世界150カ国以上で高いシェアを持っている。テルモ社は独自の技術によって、患者にとってより優しく快適な医療プロセスを追求し、最先端技術の応用によって医療処置に伴う痛みや不快感の大幅な軽減を実現している。テルモ社は、最高基準を満たす医療製品の開発に長年の努力を積み重ねてきた結果、その製品の安全性や精密さのみならず、患者の良好な回復と生活の質(QOL)の維持においても最高水準に達している。

私たちが見学したテルモメディカルプラネックスは神奈川県に位置し、建築面積は14000平方メートルあり、医療従事者たちの医療技術とテルモ社の製造技術によって新しい医療技術の開発を目指した施設である。このセンターは



「イースト」と「ウエスト」で構成されている。ウエストにはエックス線造影室や簡単な設備を備えた手術室が設けられており、イーストにはホスピタルスタジオおよび各種の医療シミュレーターが揃っている。この棟では、血管模型やバーチャル環境による最先端の医療トレーニングや静脈注射などの基礎的なトレーニングができるだけでなく、技術開発や製品開発も行われ、さらに関連セミナー、学術会議や意見交換会なども開催されている。2009年には、この研究施設に研修やトレーニングおよび見学で訪れた医療関係者は1万人を超え、2002年に開設されてからは、この施設への訪問者数は4万人を超えている。

メディカルプラネックスにあるホスピタルスタジオには、手術室、病棟、ナースステーションなどの設備が整えられており、実際の病院機能がリアルに再現されている。他にも10台を超えるビデオカメラが、現場にいるトレーニング参加者の手や腕の動きをモニタリングできるだけでなく、室内全体の状況もモニタリングすることで、後に参加者各々の動作や全体的な作業の流れに対して細部に至るまで徹底的な検証と評価がなされ、トレーニングの参加者全員が自分自身の課題や犯したミスを明確に理解できる仕組みになっている。それゆえ、この施設では医療現場で生じる恐れのある多くの課題に関して実践トレーニングを施すことができ、医療事故を未然に防ぎ医療の安全性を向上させるうえで多大なる貢献をしている。



知っていますか？

今回の見学では、非常に斬新な印象を受けた。医療に対して私たちはもしかしたらテレビドラマや病院で受けたイメージに留まっているのかもしれないが、実のところ、簡単な機器や手術に隠れたエピソードは少なくない。私たちと共にその真相に迫ってみることにしよう！

1. テルモ社とはどんな企業か？

テルモ株式会社は、医療機器開発や医薬品製造の大手企業である。同社は、使い捨ての医療用器具や輸血用器具、医薬品や栄養補助食品、血管造影および治療用ガイドワイヤー、医療用電子機器、人工心肺関連製品、輸液用ポンプ、注射用ポンプ、輸血用ポンプ、麻酔用ポンプ、目標制御注入法 (TCI) 専用ポンプ、検査用品、家庭用ヘルスケア関連製品など多種多様なラインナップを取り揃えている。

2. テルモ社は医療製品においてどんな実績を残しているか？

- 1963年 国産の使い捨て注射器を日本で初めて発売
- 1969年 国産の血液袋を日本で初めて発売
- 1973年 国産のソフトバック入り輸液剤を日本で初めて発売
- 1982年 世界に先駆けてホローファイバー型人工肺を発売
- 2007年 世界初の磁気浮上型左心補助人工心臓 (DuraHeart) を欧州で発売

3. テルモメディカルプラネックスはどんな役割を果たしているか？

- a) 医療従事者のトレーニング
- b) 商品開発の新拠点
- c) テルモ社員の教育拠点
- d) 企業ブランドおよびシリーズ商品のイメージアップを目的とした展示センター

4. テルモ社は中国国内の拠点をどこに構えているか？

テルモ(中国)投資有限公司(北京)、テルモ医療産品(上海)、テルモ中国(香港)、長春工場、杭州工場
販売ネットワーク拠点(長春、瀋陽、済南、西安、成都、武漢、南京、杭州、台北、広州)

5. テルモ社による治療への取り組み

目的:患者の身体的負担を極力軽減し、医療によって社会貢献に尽くすことをモットーとする。

セールスポイント:患者の身体的負担を軽減することによって、手術が可能な患者を増やすことができ、入院期間の短縮や手術費負担額の軽減を実現。テルモメディカルプラネックスでは、医師を対象に手術に関するトレーニングを行い、手術の精度を高める一助となっている。

感想

短い午前のひと時だったが、施設の見学だけでなく、グループ毎に注射や心臓血管の疑似手術など普段ではめったにできない体験をすることができた。私たちはガラスを隔てて、医学生たちがどのように医師へと成長するのか、その過程を垣間見ることができた。また、長い年月をかけて目標に向かってひたすら打ち込む姿勢は、我々一人ひとりにとって非常に大きな励みになるとともに、医療業務に求められる厳しさを身にしみて感じた。またテルモ社の作業室や事務棟などの施設を含む周辺環境は、採光が良く緑が豊かで、テルモ社の人に対する優しさの一面をうかがわせるものであった。今後私たちも彼らの真摯な姿勢を鏡とし、今の生活のみならず将来社会人になった時にもその姿勢を貫き、中国の医療衛生事業をさらにワンランクアップさせられるように力を尽くしていきたい。



社会的責任感のある企業となる

北京郵電大学学生代表

見学日時：2013年5月30日（木） 15:15－19:30

見学場所：東京都住友商事株式会社

見学概要

本日午後、今回の訪日の旅の発起者である住友商事を見学した。商社とは日本特有の企業形態で、様々な業界の異なる会社によって構成されており、世界の経済システムの中でも大きな割合を占めており、非常に大きな影響力を有している。故に、今回の見学は尊敬の念を持って臨んだ。

私たちは先ず、報告ホールに赴き、住友商事の担当者及び中国エリア担当者による会社の成立過程と住友商事（中国）の発展の歴史について説明を受けた。住友商事株式会社は1919年設立で、資本金は1694億円。株式は東京、大阪、名古屋及びフランクフルトで上場されている。現在展開している現地法人と事務所は日本国内に35ヵ所、海外(87カ国に)156ヵ所。従業員数は4920人(住友商事グループ全体の従業員総数は30,810人)。住友商事株式会社は、日本の三大経済グループの一つである住友グループ(住友グループは創業400年以上の歴史を有する)の主要メンバーの一つで、すでに創立85周年を迎えている。グローバル500の中では32位で、日本においては12位にランクされている。

住友商事は中国では1979年の中日国交正常化後に最初の事務所を設立してから現在に至るまで、すでに15の事務所を構え、鉄鋼、化学工業、機械、電子、紡績、物資、物流、IT等の各業界を含む120の投資プロジェクトに参画しており、その投資額は約2億米ドルとなっている。





感想

私が最も深く印象を受けたのは住友商事のCSR部門である。企業の最終目的は商業利益の最大化ではあるが、このCSR部門、企業の社会的責任部門(Corporate Social Responsibility)について住友商事の人々は、社会にとって有用な企業とは、一定の経済効果産出という貢献をすると同時に社会に対して貢献をしなければならないと考えている。そして公益事業をはじめ、小さなものでは募金による社会へのフィードバック、大きなものでは植樹造林、社会環境の改善など、これらは企業に対し直接的な経済効果は生み出さないが、企業としてやるべきことであるのは確かであり、大きな経済体として、一定規模の社会資源を占有しているのであるから、社会に還元し社会をより良くする責任が有ると認識している。一方中国は、全ての企業が商業利益最大化の追求に走り、社会貢献や還元とは無縁で、彼らがこれ以上環境汚染をしないだけで私たちは満足、という状況である。

このような社会的責任感というものは、世界クラスの企業が社会に存続するための基盤である。結局、人類の発展は最終的に自然との協調共生の道に進むのであり、我々は大自然を征服する能力がないのである、しかし、仮に全ての企業に社会的責任感がなく、ひたすら環境破壊により自己の利益の最大化のみに走るのであれば、いつの日か私たちの環境は人類の生存に適さなくなってしまう可能性がある。これはどんなに恐ろしいことであろうか。

その夜、住友商事の39階でイブニングパーティーが行われ、美しい夜景を堪能すると同時に、幸運にも多くの中国出身の従業員と話をすることができ、そこで非常に多くの情報が得られた。住友商事の全従業員に対する福利厚生制度は非常によく、国籍による差別がないという。特に現在のような中日の政治関係が逼迫している状況下で、このようなことができるのは簡単なことではない。尖閣諸島問題が非常に厳しい時期に、中国国内では日本企業や日本車への破壊行為という非理知的な現象まで起こってしまった。このことに中国国民として非常に胸を痛めている。

三井化学

清華大学学生代表

見学日時：2013年5月31日（金） 10:00－13:00

見学場所：三井化学株式会社市原工場 千葉県市原市千種海岸3

見学概要

三井化学株式会社は三井グループの石油化学事業の中核企業で、日本の有名ブランドである。市原工場は1967年に設立され、ポリエチレン、ポリプロピレンなどの高度で精密な大型生産設備と多種多様な製造装置群を持つ、三井化学の石油化学製品、基礎化学製品の中核工場であり、積極的に生産活動が展開されている日本の代表的な総合石油化学工場である。

私たちが市原工場に着くと、浙江大学出身で現在は三井化学に勤務している王先輩が私たちに工場の基本的な状況、現在の発展状況及び同社が現在世界をリードする地位にある製造技術、先進的な環境保護と廃棄物処理技術を紹介してくれた。基本的な状況を聞き終わった後、私たちは車で工場全体を見学し、その見学途中には、一部の学生は下車して作業場に入って直接見学をした。1時間の見学が終わった後、私たちは見学の中で感じた疑問について、工場の責任者に質問し、最後に同社の関係者と楽しい昼食会を共にした。



知っていますか？

三井化学は現在、日本国内に約13,000人の従業員、5つの大型工場を持っている。市原工場は13の独資工場と18の合弁工場で構成され、敷地は1.8km×0.8km、現在は約1,400人の従業員がいる。工場の位置する京葉工業地帯には、さらに多くの他の化学工場があり、これらの工場は共用埠頭で原料の輸送と搬入を行うことができ、互いに通じているパイプラインも複数の化学工場が共同で原料通路を接続することで問題発生を防いでいる。例えばある企業で生産の問題が発生した場合、他の企業はその機に乗じてこの工場の注文を横取りするのではなく、自社工場でその製品の生産を助け、更にパイプラインを通じて問題が発生した工場に輸送し、その工場を援助することで共に難関を乗り越えるのである。このような助け合いの行為は、私たちにはなじみが無いため非常に奇妙に聞こえるが、この点は私たちに日本企業の価値観に対する新たな見方をもたらした。

三井化学が製造する製品は、世界をリードする地位を占めている。例えば合成パルプの製造プロセスは世界第1位、ポリプロピレンとフェノール誘導体の製造も世界第2位、アジア第1位に位置し、これは三井化学工場の先進的な技術レベルを物語っている。

三井化学は化学製品の製造と同時に、工場の汚水処理と排気ガス処理業務にも非常に気を配っている。まず全ての化学原料と成分はいずれもパイプラインを通じて輸送と反応が行われ、製造過程での環境への影響を最大限減らしている。次に、三井化学は一連の排気処理メカニズムを確立し、ボイラーから発生した排気ガスは、脱硝装置を通じ、排気ガス中の一酸化窒素、二酸化窒素、窒素などの成分を除去し、更に電気集塵機を通じて排気ガスの中の塵埃物質と浮遊粒子状物質を除去し、最後には更に処理を経た廃水と共に決められた時間に放出される。しかもこれらのデータはすべて定期的に千葉県庁に報告しなければならない。三井化学はまた定期的に数千万円を使って環境保護設備を更新し、環境安全面の厳格な管理を確保している。

三井化学はまた自社の社会的役割を積極的に履行している。例えば住民との交流、生態環境の構築(私たちが食事をしたレストランの外側は一面の非常に美しく広大な緑地だった)、保育園の建設も従業員と周辺居住区の子供たちに教育と遊びの場をもたらし、従業員たちの育児の負担を軽減している。

感想

三井化学を見学して最も感銘を受けた点は、同社が特に重視する環境保護の概念と緑化の構築で、広大な緑地は私たちが大型化学工場にいることを全く感じさせなかった。しかも工場から1km以内は居住区だが、居住区では工場による環境と騒音の影響は全く無く、逆に従業員の生産と生活に便宜をもたらしている。



工場を見学した時、私たちはまた「無災害記念」の記念碑を見かけたが、碑に刻まれた年号は昭和56年、今年ですでに平成25年で、すでに32年の歳月が経過している。このような安全な生産の確立は非常に厳格で入念な態度の上に確立されており、私はこれがとても容易なことではないと感じるが、常に化学工場の事故を耳にする中国では、これは学ぶべきところである。

しかも市原工場はまた地理上の優位性を非常に良く利用している。例えば海上からの取水冷却は非常に便利で、また輸送の上でも多くのコストが節約できる。工場建屋全体の構造は非常にコンパクトで、また多くの企業が集中しており、もしある方面の機能が不十分あるいはリソースが不足であれば、他の産業が直ちにカバーする、このようにして工業団地全体の効率を大いに高めている。中国の企業は往々にしてそれぞれが独断専行を好み、更には悪性競争を行うため、日本のような良好な相互協力をする競争の雰囲気は全くあり得ない。

工場見学の途中、私たちは偶然ある作業場の壁に手描きのアインシュタインの肖像画があるのを見つけ、化学工場での生活も私たちが想像するほど退屈ではないのだと思った。彼ら従業員は絵画作品を描く創作能力まで持ちあわせている。それは単にプライベートな活動であるだけでなく、彼らのゆとりある生活を反映したものだと言える。

私たち清華大学の6人の学生はいずれも理工科専攻なので、将来工場で働く可能性はみな非常に高く、今回の三井化学市原工場の見学は、私たちの工場生活に対する見方を変えてくれた。実は決して私たちが想像するような退屈で、プレッシャーの大きいものではなく、逆にゆとりがあり、安全で、騒音と環境汚染に悩まされなくても良いのである。それでは、このような理念を中国の企業は実行できるのか、国内の化学工場が学び参考にすることができるのか。これは私たちが考えるべき、またおそらく私たちが今後就職する時に考慮すべき問題であり、更には私たちの三井化学見学での大きな収穫でもあった。

新日鐵住金への訪問

中国人民大学学生代表

見学日時：2013年5月31日（金） 14:00－16:30

見学場所：新日鐵住金 君津製鉄所



見学概要

訪問の6日目、私たち一行は東京湾沿岸に位置する新日本製鐵住金の君津製鉄所を訪れた。先ず私たちは製鉄所の本部ビルに行き、製鉄所の佐藤部長から歓迎のあいさつを受けた。同氏は訪日団の製鉄所見学に歓迎の意を表明し、そして訪日団に鄧小平氏がかつて工場を訪れた時に残した揮毫を示し、私たちが共に中日友好のために努力するよう励まして下さった。

その後、私たちは製鉄所の簡単な紹介ビデオを観賞した。君津製鉄所は1965年に設立されたアジア最大の製鉄所で、広大な敷地は東京ドーム220個分に相当する。そして新日鐵住金の日本国内最大の需要地である関東圏の生産基地として、生産する製品の品質、設備と生産量で、いずれも日本で最先端の地位を占めている。同製鉄所はまた環境保護を非常に重視し、製鉄で発生するスラグ、排気ガス、廃水を積極的に処理並びに利用するなど、緑と光に満ち溢れた製鉄所である。

さらに私たちは作業服とヘルメットを身に付け製鉄所内部に入り、4号製鉄反応炉、及び厚板熱間圧延工場を見学した。鋼鉄の音がゴロゴロと響く中で、私たちは初めてこのように間近で非常に高温の鋼がいかにより一歩一歩剪断され冷却されるのを見る事ができた。真っ赤な鋼板が生産ラインから響きを立てて疾駆して来た時に吹き出して来た熱気は、私たちにとって生涯忘れ難いものになるだろう。

最後に私たちは工場の本部ビルに戻り、工場の責任者と質疑応答を行った。質問には従業員の職業病予防と福利厚生、二酸化炭素の排出処理とユーザーの鋼材に対するカスタマイズ・サービスなどがあり、責任者は私たち一つ一つ丁寧に答えてくれた。



知っていますか？

1. 新日鐵と住金はかつてそれぞれ日本で第1位と第3位の大鉄鋼企業だったが、現在の「新日鐵住金株式会社」は、新日鐵と住金両社の2011年の「合併再編」により設立された。合併再編後の新日鐵住金は、現在すでに粗鋼生産能力で世界第2位の鉄鋼グループになっている。
2. 中国の鉄鋼業の発展と新日鐵は不可分の関係にある。1977年、中国中央政府は鉄鋼生産量の上昇を国民経済発展の重要目標とした。その当時、多くの人々が「日本から新技術と新設備を導入し、中国の鉄鋼工業を発展させる」よう提案したため、同年10月、鄧小平氏が日本を訪問、新日鐵君津製鉄所を視察し、そして視察に随行した新日鐵の責任者に対し「この工場のような製鉄所を私たちにも造って欲しい」と述べた。その後、政治局は幾度もの討論を経て、新日鐵からの製鉄設備プラント導入を決定し、そして上海に工場を建設した。2年目には上海宝山鋼鉄総工場はまた新日鐵からプラントを導入し、現在、中国の鉄鋼業に大きな影響力を持つ宝山製鉄所が誕生した。
3. 君津製鉄所の循環水利用率は85%～90%にも達する。大多数が洗浄、冷却、凝固に使用されたその水は下水道に流れて行くように見えるが、実際にはすべて回収される。残りの10%の排水もその環境に対する無害が確保されている。



感想

もしこの12日間で何が衝撃的だったかと言えば、新日鐵での見学は絶対にそのうちの一つに数えられるだろう。

見学内容はともかく、ただ単に赤白2色の作業服を着て、赤いヘルメットを被った出で立ちだけでも、私たちのような都会育ちの工場には無縁だった学生にとっては、喜びと興奮を感じるのに十分だった。

企業の生産上の機密に関わるので、残念なことに私たちはあまり多くの映像資料を残すことはできなかったが、高く大きな溶鉱炉に向き合った時に感じた衝撃、そして鄧小平氏がかつて見学したコースに沿って工場内部に入って感じた驚きに、私たちの心の中は色々な想いが交錯した。

気温が40℃に迫る工場内で、全体が真っ赤になった一塊の鉄板が工場の端から機械のレールに沿って私たちに向って疾駆して来る。それに伴って来たのは、耳をつんざくほどの音と押し寄せる熱波だ。本当に想像し難い事だが、こんなに巨大で高熱の鉄板が、最後には様々な太さの線材になるのだ。

ふと、見学通路の下で作業員が現場作業を行っているのを見かけた。その時の最初の感覚は、こんな高温の状況下で作業を続けている人がいるのかという不思議さだった。しかし、よくよく考えてみれば、日本だけではなく中国でも多くのこのような現場作業員たちが、製品の品質と工程の順調な進行のために極限の作業環境に耐えているわけで、私の中で一種の尊敬の念が自然と沸いて来た。

現場見学中に作業をしている人々に出会ったが、国内の多くの工場に比べ、このように現場第一線で奮闘している従業員の数是比较的少ない印象を受けた。私はこの背後には科学技術の力による支えがあるのだと思う。科学技術は第一の生産力だとよく語られるが、これら演説と教科書からの言葉が、今日の見学の中で一種の現実的かつ真実の姿で私たちの前に現れた。

私が思うに、科学技術は生産力向上の保障であるだけでなく、同時にまた人間本位における保障でもある。単純な理屈である、もしより先進的な科学技術があれば、こんな辛い現場第一線の作業環境で必要な作業員の人数は減るだろう。雇用需要などのより深い問題はあるかもしれないが、人間本位的な配慮の観点から見れば、このように極限の労働環境で作業する労働者の数を減らすことができれば、これは彼らの健康と安全のいずれにとっても大きな意義があると思われる。

しかし中国と日本では国情において非常に大きな差異があることは否定できず、単に人口数から見ても、非常に大きな違いがある。日本で適用されたいくつかの発展モデルは、おそらく現代の中国にとってはあまり適用できないかも知れないが、私たちが認識しなければいけないのは、科学なくしては一步も前に進めないということだ。

今回の日本企業への訪問で、私が最も強く感じたのは科学技術の重要性である。他国の先進性を称賛すると同時に、私たちはまた自らの祖国に対し希望を抱き、更に自らが現在目にし学んでいる知識と理念を用い、着実な研鑽努力をする事によって、祖国の未来の発展のために自らの力を捧げなければならないのである。

みずほコーポレート銀行訪問記録

中国農業大学学生代表

見学日時：2013年6月3日（月） 10:00—12:00

見学場所：みずほコーポレート銀行

見学概要

「みずほ」とは、「みずほの国」から名付けられ、イネは青々とし、穂の中には米がたくさん詰まっているという意味があり、五穀豊穡という豊作の様子を表わしている。このような伝統的な意味を持つ名前に、私たち中国の大学生は大変親しみを覚えた。みずほコーポレート銀行（以下みずほと略称）は東京の千代田区にあり、周囲には高層ビルが立ち並んでいた。好天に恵まれたことから、私たち大学生訪問団の団員たちは笑顔でみずほに到着した。バスを降りるとすぐにみずほの温かいおもて



なしを受けた。この時お互い言葉は通じなかったが、微笑みが最良のかけ橋となった。

会議ホールに入るとすぐに正式な交流プログラムが始まった。まず、みずほ中国営業推進部の大門栄城部長から、中国におけるみずほの業務についての紹介があった。大門部長は説明の中で、みずほは日本の銀行の中で、初めて専門の中国営業推進部を設立した銀行であり、これもみずほが中国業務に精通していることの現れであり、またみずほの中国市場への重視と期待の

現れでもあると語った。また、みずほは中国の各現地政府や企業との協力を非常に重視し、中国で多くの社会貢献活動を行っている。例えば、中国の金融分野の人材育成に協力し、省エネ環境保護分野の提携契約を通して、中国の各都市が大々的に推進している省エネ環境保護政策に大いに貢献している。この他、大門部長は、昨年7月以降の中日両国の政治的緊迫の局面について、現在もこのような緊迫状況にあるため、中国におけるみずほの数多くの文化交流事業もすべて中断されていることにも言及した。大門部長は話の中で何度も「理解」と「コミュニケーション」という言葉を使い、中日友好協力への願いを語った。また大門部長は、とりわけ、みずほの対中借款プロジェクトに力点を置き、みずほと中国石化をはじめとする大型国有企業とは長期的な協力関係にあることを強調した。このことから、みずほコーポレート銀行の中国における社会主義近代化建設への強力なサポートと貢献がうかがえる。真剣に語る大門部長の説明を通し



現れでもあると語った。また、みずほは中国の各現地政府や企業との協力を非常に重視し、中国で多くの社会貢献活動を行っている。例えば、中国の金融分野の人材育成に協力し、省エネ環境保護分野の提携契約を通して、中国の各都市が大々的に推進している省エネ環境保護政策に大いに貢献している。この他、大門部長は、昨年7月以降の中日両国の政治的緊迫の局面について、現在もこのような緊迫状況にあるため、中国におけるみずほの数多くの文化交流事業もすべて中断されていることにも言及した。大門部長は話の中で何度も「理解」と「コミュニケーション」という言葉を使い、中日友好協力への願いを語った。また大門部長は、とりわけ、みずほの対中借款プロジェクトに力点を置き、みずほと中国石化をはじめとする大型国有企業とは長期的な協力関係にあることを強調した。このことから、みずほコーポレート銀行の中国における社会主義近代化建設への強力なサポートと貢献がうかがえる。真剣に語る大門部長の説明を通し

て、みずほの人々の熱心さと集中力、そして彼らが常に企業の目標と社会的責任を結びつけているということが見て取れた。この点は中国企業が学び、手本にすべきところではないかと感じた。

最も印象深かったのは、大門部長が、みずほは全力で海外の日本企業のために資金提供サービスを行っていると話したことである。その前に見学した三井化学で感じたこととも重ね合わせ、私は日本の企業間のこういう相互扶助の精神にとっても感心し、この点も日本が強い国際競争力を発揮できる要因の一つだと感じた。



大門部長の説明が終わった後、みずほ総合研究所市場調査部のシニアエコノミスト(シンクタンク)である野口雄裕さんによる「アベノミクスと日本経済」と題する講演が行われた。野口さんの緻密でロジックに富む講演は非常にインパクトがあり、私たち経済が専門ではない学生も、日本経済が現在直面している状況や安倍首相の新経済政策に関して、おおよその理解を得ることができた。



野口さんの講演を通して、日本が現在直面している直接的な問題、つまりデフレは、消費者物価指数の低下、輸出入額の減少、国内総生産(GDP)の低下に現れていると理解できた。それまでの民主党政権は、主として国民生活を重視し、バランスのとれた社会資源の分配を通して、経済の停滞がもたらすマイナス面の影響を改善しようとしたが、経済停滞の問題を本質的に解決したわけではなく、更に大きな財政逼迫をもたらすことになった、ということを知った。そして安倍首相をトップとする自民党政権は、大胆な金融政策を通じて、経済停滞

の問題を根本的に解決しようと取組んでいるが、これは大志溢れる未来へのプロジェクトである。

野口さんは、日本の戦国時代の武将である毛利元就の「三矢の教え」の逸話を引用して、日本が現在推し進めている新経済政策は、成長戦略、財政政策、金融政策という3本の矢を合わせ、三段階に分けて経済を活性化・再生するという日本の二カ年計画であると解説した。現在の円安は、即ちこの経済計画の一部である。同時に、野口さんは日本が現在直面している多くの問題についても説明してくれた。第一点は、デフレ対応の困難さについてである。主要先進国は第二次世界大戦後、どこもデフレに見舞われたことがないが、日本の人口の高齢化と自国の負荷を超える輸出指向型経済が、日本を第二次世界大戦後初めてデフレに直面した主要先進国にしてしまったのである。また、デフレとインフレの非対称性により、日本はこういった問題を解決した経験がほとんど無く、そのため日本政府と日銀がしっかりと連携して、あらゆる政策に取組むことが求められている。戦後デフレに見舞われた先進国はまだないが、私は日本は、当時「日の沈まない国」と言われていた英国が衰退した経験に学ぶことができるのではないかなと思う。その頃の英国も過負荷の輸出指向型経済であり、人口が高齢化していたかどうかは確定できないが、国民のイノベーション能力と労働力が低下していたということは確かである。

この他、消費者物価指数CPIからも分かるとおり、日本のCPIは1990年代からすでに衰退期に突入し、しかもその頃は日本企業の世界進出における黄金期である。この点からも、デフレと日本の過負荷の輸出指向型経済とは密接につながっていることが分かる。

野口さんの講演を聞いて、私がずっと腑に落ちないと思っていた疑問も解けた。その疑問とは、日本政府の債務は



ギリシャやイタリアを遥かに超えているのに、なぜ依然として比較的健全に運営されているのかということだ。これについては、日本の国債のほとんどが国内資本で消化されているため、仮に日本経済の低迷が続いたとしても、国民は資本を撤収することはないので、政府にとって大きな危機にはならないということである。これも、政府と国民の信頼関係があるからである。それに対しギリシャやイタリアなどの国債は、そのほとんどを海外の財閥が購入しているため、一旦景気が悪くなると、資本はすぐに引き上げられ、経済の悪化と政治的危機を招くことになる。このことは、別の角度から東西間の違いを物

語っている。中国も今後似たような問題に遭遇するであろうが、その際には間違いなく日本は学ぶべきすばらしい手本であると思う。

野口さんの講演が終了した後、私たちはみずほのレセプションルームに移り、食事を共にした。そして非常に光栄なことに、みずほコーポレート銀行の常務執行役員である菅野暁さんとお会いすることができた。菅野さんの心の込もった温かいご挨拶のおかげで、その場は和やかなリラックスした雰囲気になり、そして菅野さんの見識深く上品で穏やかな人柄に、私たちは感服させられた。次に、中国の大学生訪問団の郭寧団長から挨拶があり、参加者一同乾杯をした。宴会の席上、菅野さんは意欲的に、そして根気強く私たちとコミュニケーションをとって下さった。菅野さんとの会話を通して、みずほが今後更に中国との協力関係を強化し、中国での社会的責任を高めようとしていることを知り、私のみずほに対する期待がより高まり、また大型金融グループとしての魅力と奥深さを感じた。この他、私たちはみずほの中国人行員とも交流をし、彼らに日本に関する様々なことを訊ねたり、今回の訪問で私たちが感じた疑問点などについて答えてもらったりした。



こうして私たちのみずほコーポレート銀行への友好訪問は終了した。国際的に有名な銀行として、みずほは社会的責任や環境保護という分野において、大変な努力を払っているということを今回身をもって体験することができたが、これはまさに未来を見据えた視点である。その中でも強く印象に残っているのが、みずほが中国各地にて中国の社会主義近代化建設に積極的に参画し、責任感のある国際的な大企業というイメージを示しているということである。現在、中日の政治交流は低迷期にあるが、経済交流は出来るだけその影響を受けないようにすべきであり、この点は両国民間の共通の願いでもある。この他みずほのシンクタンクの報告書を読んで、日本経済が現在直面している課題と日本政府の現状における対策や措置、また日本政府が日本経済の振興計画を制定したことを知った。直近の状況から見ると、確かに効果が上がっているようである。最後に、今回の私たち大学生訪問団を代表して、みずほコーポレート銀行の温かいおもてなしに心からの感謝を申し上げたい。

早稲田大学での自由交流

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2013年6月3日（月） 14:30－19:30

見学場所：早稲田大学 東京新宿区

見学概要

今回の訪日活動の日程も半分が過ぎ、楽しかったホームステイを終えた私たちは、新たな週を迎えた。6月3日の午後、我々第12回「走近日企・感受日本」代表団の一行は、日本で最も著名な大学のひとつである早稲田大学を訪れた。早稲田大学は日本の私立大学の中で最も歴史のある大学のひとつとして1882年に創設され、当時は「東京専科学校」と呼ばれていたが、1920年に「早稲田大学」と改名された。この大学には計10の学院が設置されており、その中に計14の学部、22の大学院、14の研究所があり、現在54,000人の学生が在籍している。2010年時点で、計90の国と地域から留学生を4000名以上受け入れており、その数は日本でトップである。そして今回私たちのキャンパス見学の引率をしてくれた学生の中にも韓国からの留学生が一人いた。

早稲田大学のキャンパスに到着後、私たちはまずキャンパス見学をした。私たちは早稲田大学の創設者である大隈重信の名から命名され、すでに100年以上の歴史を持つ大隈講堂を見学し、その歴史感と文化的気風を体験した。中国前国家主席の胡錦濤、中国元国家主席の江沢民、アメリカ元大統領のクリントン、日本の元総理大臣小泉純一郎などもかつてここで演説を行っている。講堂の左側には7階建ての時計塔があり、私たちはこの時計塔に登り、三面になっている大時計の内部構造を見ることができた。またその屋根には楕円形の採光窓があり、一種の「世界の融和」的な雰囲気を出していた。その後私たちは、早稲田大学の有名な演劇博物館の前で、早稲田大学の「試験の神」と「親密な」握手をし、早稲田大学の創設者大隈重信の石像と記念撮影をし、早稲田大学の「歴史の壁」を見て、キャンパス内の小さなカフェでくつろぎ、学生たちと芝生の上ではしゃぎながら午後の楽しいひと時を満喫したのである。

キャンパスの見学を終えた後、私たちは26号館の302会議室に集まり、現在早稲田大学で事務の仕事に就いている中国籍の先生の説明を聞いた。先生と学生たちはお互い活発に意見を交わし、積極的に論議し、場はとても盛り上がった。私たちも説明の中から、早稲田大学の最も特色に富んだ「自由な学風」、そして早稲田大学の人材育成の目標と方法を知ることができた。

次に私たちは政治経済学院の白木教授のゼミを訪れ、ゼミの学生とテーマ交流を行った。その第一テーマは「将来の人生設計」で、第二テーマは「高齢化社会への対策」であった。両国の学生はそれぞれ英語または日本語での交流を自由選択し、それにより6～8人の数グループに分かれ、グループ内で30分にわたる討論をし、討論終了後、グループ毎に結果を発表した。私たちと白木ゼミの学生たちは積極的な討論を行い、その中で中日両国の様々な方面について理解を深めることができた。

最後に夜6時から、私たち代表団一行と白木ゼミの学生、そして大学の国際部及び留学生センターの教職員と留学生一同の参加による交流パーティーが行われた。皆は共に夕食を楽しみながら、非常に良い雰囲気の下、より交流を深めることができた。パーティーではさらに中国の学生たちの素晴らしいショーや、郭寧団長と白木教授の挨拶なども行われた。パーティーの後、私たちは名残を惜しみながら早稲田大学の先生・学生たちと別れを告げ、ホテルに戻るバスに乗り込んだ。本日の早稲田大学見学の日程もこれにて無事終了となった。

知っていますか？

Q：早稲田大学は非常に多くの優秀な人材を育てており、その中には著名な人物が少なくない。それらの有名人とは？

A：野田佳彦、福田康夫等多くの日本の元首相、サムソングループの現会長である李健熙、ユニクロ創始者柳井正等

の経済界の大物、村上春樹や江戸川乱歩等の日本文学界の著名な作家、この他にも多くの優秀なメディア関係者や弁護士等を輩出している。

Q：早稲田大学建学の教旨は？

A：学問の独立、学問の活用、模範国民の造就。

Q：早稲田大学の学生たちの日常的活動は？

A：早稲田大学学生の学風は自由独立であり、普段から自身の興味による様々なサークル活動や研究グループに参加している。期末試験は最終目的ではなく、彼らは自己学習により学校の求める基準を満たしている。（注：早稲田大学には約2500のサークルがあり、それには学校に登録されていないものも含まれている。）



坪内逍遙先生との握手



男たちの記念写真—早稲田大学と対外経済貿易大学、そして関さん！

感想

私たちが早稲田大学で最も印象深かったのはその自由な気風である。

この「自由」からは、一種の学生の未来が完全に学生自身の手委ねられているというような自由と、学生に対して一つの巨大で壮麗な人生絵巻が広げられており、それを学生に自分で選択させるというような自由を感じることができるのである。私たちがキャンパスに一歩足を踏み入れると、すぐに様々な宣伝ポスターが目飛び込んでくる。その中には反戦のものや、右翼的なものもある。これら中国では学生が越えてはいけない限界が、学校内で当然のように展開されているのである。よく考えればそれもそうである。学生だけが胸に秘めた熱い想いを国事や政治にぶつけることができるのであり、学生だからこそ、学校の政治的保護や政治的寛容を最も受けるべきなのである。キャンパスを離れれば、私たちは様々な社会の枠組みに触れることとなり、本心を叫ぶことのできる大学時代は、あるいは沈黙の中で過ごすべきではないのかもしれない。

それから早稲田大学の「我々には『優秀』な卒業生はなく、『優秀でない』卒業生もいない」という理念は、私たちに深い印象を与えた。一般社会の中においては成功の基準があるのかもしれないが、早稲田大学の中には存在しないのである。早稲田大学は、全ての学生に十分な自由を与えており、そこには成功の基準を定める自由も含まれているのである。本来、全ての人間にはそれぞれの生き方があり、他人の成功を追従し自身の夢を顧みない生き方というのは、他人の一時の話題になるに過ぎない。本当に「生きている」といえる人は、気概を持って自己の道に没頭する人なのである。私たちと交流した白木ゼミの学生たちも、各々の姿勢というものを持っており、自然体で心に余裕と自信を持っていた。酒井麻衣さんという女子学生は、その語り口の中に真摯さと確固たる自信が垣間見え、そのおおらかで優しい眼差しに、私は同じ女性として心から尊敬の念を抱いた。女性としては、将来職場において様々なルール(例えば化粧についての規則等)が有るとしても、自信に満ち溢れた態度で自分らしく生きていければ、それ自体が素晴らしいことなのだと思う。

このような自由は学生だけのものではなく、教師たちも同様で、どのように自分の学術的生涯を送っていくのかということを選択する権利を持っている。早稲田大学には教師に対する考査基準、研究発表の任務、懲罰のプレッシャーがなく、ボーナスの誘惑もない。以前いくつかの管理ケースを見たことがあるが、一部のトップクラスの企業は、従業員全てに対して平等に扱っていた。ボーナスも懲罰もないということは、人と人の間に確実に存在する能力の差を無視しているということなのであろうか？これでは優秀な従業員にとっては非常に不公平なのではないのだろうか？ここでまたあの問題に立ち戻る。何をもって「優秀」とするのか？という問題である。あるグループが研究しているのは宇宙工学技術、またあるグループが研究しているのは紅樓夢だとして、どちらのほうが優秀なのだろうか？ある教授は一年間の新元素の研究で結果を得、またある教授は10年間ショウジョウバエを研究し、未だ継続している。ある学者は理論研究を行い、またある学者は実証研究を行っている。一体どちらのほうがより「優秀」なのだろうか？教師に「ボーナス」を支給することはつまり同時に、ボーナスをもらえなかった教師は、きちんと努力していなかったと認識されるのである。しかしその実は、どの教師も皆勤勉に汗を流しており、ただ学術的専攻が違うだけなのである。このロジックを追究していくと、賞罰制度は一種の不信用にならないだろうか？信用なくしてどうして自由な学術研究など語れようか？

早稲田大学での見聞は、今人生の岐路に立っている私たちにとっては非常に有意義なものになった。遠くない将来の就職の際は、私たちも自由な姿勢で、自分の信念を貫き通したいと思う。

松本楼が見守った信念

北京外国語大学学生代表

見学日時：2013年6月4日（火）12:00－14:00

見学場所：東京都千代田区日比谷公園1-2松本楼



見学概要

松本楼は、明治36年(1903年)に建てられた、孫中山(孫文)の生前の親友であり、兄弟の契りを交わした梅屋庄吉の旧居である。松本楼は日比谷公園の中央に位置する三階建ての西洋式建築で、周りを緑や美しい花々に囲まれ、内部の装飾はこだわりに溢れ、雅やかな佇まいを見せている。私たち一行は、ここで食事をとりながら、小坂文乃女史の語る孫中山(孫文)と梅屋庄吉の友情についての話を聞いた。



知っていますか？

1.あなたは、宋慶齡と松本楼の玄関ホールに陳列されているピアノの物語を知っていますか？

宋慶齡は、帰国前ずっと梅屋家に住んでいた。そのころこの燭台のついたピアノが常に彼女と共にあり、国母である彼女の内心の情感の起伏を奏でていた。このピアノは日本楽器製造株式会社(現:YAMAHA)が1907年に製造したもので、日本産の最古のピアノの一つである。それは、梅屋夫妻が彼らの大事な一人娘のために購入したもので、その子孫が、戦火からこれを守り保存し伝えてきている。現在、それは松本楼の玄関ホールに陳列され、我々に当時の宋慶齡の優雅でロマンチックなピアノ演奏の物語を語りかけている。

2.あなたは、孫中山(孫文)と梅屋庄吉の盟約を知っていますか？

孫中山(孫文)は清朝の末期に生まれ、中国が西欧列国から圧迫を受けている状況に、清朝の専制政權を打倒すべく、満清帝政の駆除、中華の復興、国家体制の維持を目指し、「革命」の誓いを立てた。梅屋庄吉は明治維新の年に生まれ、日本は西欧列国との「不平等条約」から脱却し、「真の独立」をするべきだと考えていた。

「中国も日本も、西欧列国の束縛から解放され、真の独立を打ち立てるべきである。更には、深く殖民の苦しみを受けているアジア全体が、独立自主の道を歩むべきである!」、孫中山(孫文)と梅屋庄吉はこのような共通認識の下、「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援する」という盟約を結んだ。

3.あなたは、梅屋庄吉の孫中山(孫文)と辛亥革命に対する援助をご存知ですか？

1895年、27歳の梅屋庄吉は、香港で当時わずか29歳の孫中山(孫文)と出会い、二人は共同の民主革命思想の下、深い友情を結んだ。梅屋は「盟友であり兄弟でもある」孫中山(孫文)のために、一生物質的また精神的な支援をし続けたのである。

孫中山(孫文)が日本に亡命していた当時は、梅屋家に寄宿していた。梅屋は日本の各界の人々に孫中山(孫文)を紹介し、以降の革命活動のための基礎を築いたのである。孫中山(孫文)が辛亥革命を推進していた頃、梅屋はその全財産をはたいて、その革命組織のために飛行機・弾薬等の大量の武器を購入したのである。孫中山(孫文)の死後も、梅屋は依然としてずっとその思想と遺志を堅持した。彼は資金調達して四体の孫中山(孫文)の銅像を建造、それを中国各地に寄贈し、同時に当時外務大臣の任にあった広田弘毅と協力し合い、中日友好のためにたゆまぬ努力をささげた。統計に拠れば、梅屋庄吉が、中国の革命のために投入した資金の総額は、日本円で約2兆円(1300億人民元相当)にも上るのである。

感想

今回、松本楼を訪れる前、松本楼にまつわるいくつかの話を聞いていたが、皆の心の中に一つの疑問が浮かび上がっていたのではないだろうか。それは、何が梅屋氏に全財産をかけてまで30年間続いた革命を支持させたのか？現代の人々は恐らく「きっと何か利益を望めた」、「彼はきっと革命成功後、この中国の地で最大限の経済的利益を得ようとしていたのだ」と言うのではないだろうか。しかし当時の話を聞き、本当のことを知った私たちは、以前の考え方を恥ずかしく思い、自分の浅はかな見方で他人の善良なる意図を推し量っていたことに自責の念を感じた。では、一体何が梅屋氏の長期にわたるたゆまぬ支援を支えていたのか？話のいきさつを聞いた後、それは、心の内なる信念によるものであり、理想に対する飽くなき追求であるとわかった。若き日の梅屋氏はアジア諸国を渡り歩き、欧米諸国の強大さと、虐げられているアジア各国の苦境を目の当たりにした後、自分の手でアジアを振興させようと決心したのである。そして、これはまた彼がその後の人生において追求し続けた理想でもあり、孫文氏の革命を支援するために心血を注ぐことを支えていたのである。

理想の力は、今も昔も偉大なものである、しかし現在の青年は、自分の理想と信念を語ろうとしなくなっているようである。理想や信念が無いからかも知れない、或いは現実というものを前にして、理想や信念が消えて無くなってしまったからかも知れない。しかしこのようなことは、もとより若者の身に起こってはならないことなのである。私たちは、最もアイディアや意見があり、最もチャレンジや行動ができ、最も活気に溢れる年代であるべきである。青年は時代の希望であり、民族の希望である。自己の理想や信念を探究し、その理想や信念のために努力奮闘することは、私たち個人のことだけではなく、国の未来にも関わっているのである。青年の責任といわれるものは、つまりもう既にわがままで天真爛漫でも良かった幼年期を抜け出し、自己の運命を他人、社会、ひいては国家全体と関連付けることである。今回の訪日代表団の一員として、私たちが担っているのは中日両国の民間交流だけではなく、それ以上に崇高な使命感と責任感を持ってその都度の見学に臨み、自分たちの手でこの世界の未来の発展のために力添えをすべきなのである。

いかにゴミの無害化を成し遂げるか

北京郵電大学学生代表

見学日時：2013年6月5日（水） 09:30－11:30

見学場所：新江東清掃工場

見学概要

日本の金融業、重工業、医療業界等を見学した後、私たちは東京都の新江東清掃工場、つまり私たちの言うところのゴミ処理工場を訪れた。日本は資源が決して豊富ではない島国にありながら急速に発展し先進国となりえたことは、日本のゴミ分類と処理の技術に密接に関わっている。世界の中でも日本のゴミ分類意識とゴミ処理技術は一、二を争っているため、私たちは日本のゴミ処理工場に非常に興味を感じていた。

清掃工場到着後、私たちは先ずゴミ処理は減量化、再利用、リサイクルの三原則に従って行われているという紹介映像を観賞した。そして清掃工場全体のゴミ処理工程が、ゴミ運搬車によりゴミがリサイクル可能ゴミとリサイクル不能ゴミの二種類に分類され、リサイクル不能ゴミは、さらに可燃ゴミと不燃ゴミに分けられることを知った。この工場では、主に可燃ゴミを処理しており、ゴミ運搬車によりゴミが清掃工場に運ばれた後、ゴミピットに入れられ、鉄等の一部の金属は磁石を使用し回収され再利用されている。

日本において可燃ゴミは一般的に全て焼却される。それは、埋立可能な土地が非常に少ないからである。不燃ゴミは、先ず粉砕機で粉砕される。ただひたすら焼却しても燃焼不十分になってしまうので、先ず、より燃焼しやすい様にマシンアームで攪拌を行いゴミを均等にするのである。十分に攪拌した後、ゴミの焼却を行う。燃焼によって発生した熱エネルギーは、工場内の火力発電装置に送られており、熱エネルギーの十分な利用がなされている。焼却時に発生する気体は、クリーンなものに処理された後、大気中に放出される。ゴミ焼却後の特殊処理を経ることによって発生するスラグは、道路の舗装に使用することができる。焼却炉は一日24時間フル稼働しており、毎年2回メンテナンスが行われる。

焼却後のアッシュはさらに攪拌処理され、最終的に海の埋め立てに使用されるか、或いは、ゴミ処理工場がすでに線引きしている海中に埋立てられ、アッシュによる汚染を防いでいる。灰は一般的に海の埋め立てに使用される。埋め立ての前に、埋め立てるエリアを隔離し、その後土と灰を海底に投下し圧力をかけて固めるのである。

日本全体で、1200ヵ所のゴミ処理工場がある。





感想

現代化された大都市、ひいては現代化された国は、必然的に毎日沢山のゴミを生み出している。これらはゴミではあるが、ある種の資源でもある。地球上の資源の大部分は再生不可能であり、そのためいかにしてゴミ処理を行うか、これは先進国家が解決しなければならない難題である。

日本は資源の欠乏が中国よりひどい状態である。そのためその危機意識はすでに一人一人の心に深く植えつけられており、彼らは全ての資源をとっても大切にしている。よってゴミの分類と処理において、日本は世界の最前線をいく国となり、このことは彼らがなぜ急速に発展したのかの理由の一つである。

しかし、日本も発展しながら整備してきたわけではない。彼らも同様に重度の汚染の時期を経て、後に政府が大々的に環境の整備を行うようになり、ゴミ処理についても重視するようになったのである。こうしてはじめて今日のような美しい日本の環境が存在するのである。我が国は現段階においては、汚染してから整備するということがすでに許されない状況になっている。或いは一旦汚染してしまったら整備のしようがない状況であるとも言える。よって私たちはゴミ処理問題を今まで以上に重視しなければならないのである。

その一方で、ゴミ処理の基本はゴミの分類であり、大学生である自分がゴミの具体的な分類方法を知らないことを恥ずかしく思っている。中国の主要メディアと主要の教育システムの中では、恐らくゴミ分類に関する教育がなされていないのであろう。このことも、皆のゴミ分類への意識の欠如を招いている。

日本では、一カ所のゴミ捨て場に3～4個のゴミ箱があり、ガラス瓶、ペットボトル、空き缶、生ゴミ等々に分類されている。しかし中国の大部分の場所には、緑のゴミ箱が一つ置いてあるだけで、わずかなゴミ分類のある場所でも、リサイクル可能とリサイクル不能の二つに分けられているだけで、私たちもよく何がリサイクル可能で、何が不能なのか区別が付かなくなっている。

帰国当日私たちが空港に降り立った際、突然、ゴミを捨てることがそんなに面倒でなくなっていることに気がついた。逆に、私たちがゴミを分類してゴミ箱に捨てようと思っても、そのようなゴミ箱が提供されていないのである。よって、学校教育にせよ主要メディアの宣伝にせよ、ゴミ分類への意識とゴミ分類の基礎知識の宣伝を始めるべきで、それによりはじめてゴミの無害化処理を行うことができ、ゴミのもたらす汚染を最大限抑制することができるのである。

ホテルニューオータニ東京

清華大学学生代表

見学日時：2013年6月6日（木）09:00－10:30

見学場所：ホテルニューオータニ東京 東京都千代田区紀尾井町4－1

見学概要

6月6日、日本での見学の日程も残すところあと一日となり、私たちは今回の旅で七日間にわたって宿泊したホテルニューオータニ東京を見学した。普段ならめったに出入りするところのない五つ星の高級ホテルである。私たちはホテルの発電システムや廃水処理システム、廃棄物処理システムそして空中庭園などの施設を見学した。これらの施設はホテルの環境保護と省エネに大きく貢献している。

私たちはまず空中庭園を見学した。庭園には30種類を超えるバラが植えられている。灌水に必要な水はホテル内の廃水を浄化した「中水」で賄われており、省エネと環境保護そして美観維持を兼ねている。まさに廃水再利用の優れたモデルといえる。

廃棄物処理システムにおいては、毎日厨房から排出される5トンものゴミが100%回収されて、再利用されているとホテルのスタッフは語ってくれた。ホテル内に設けられているプラントでは、厨房からのゴミがまず粉碎され、それから脱水、乾燥、発酵などの工程を経て堆肥に生まれ変わり、その後農家に送られて農作業に活用される。またホテルで毎日排出される1000トンもの廃水もバイオ処理技術によって浄化され、トイレの洗浄水や庭園内の樹木・草花への灌水などに使用されている。



ホテルの見学時に、私たちは巨大な発電機から鳴り響く大きな音を聞いた。ホテルの総消費電力の約30%がこの発電機によって賄われており、電気代の節約だけでなく使用電力のコスト削減にも繋がっている。

また、見学中に目にした幾つもの大きな木桶に興味をそそられた。これらの木桶は5メートル近い直径と高さがあり、相当量の飲料水を蓄えておくことができ、さらに優れた殺菌消毒効果もある。ホテルのスタッフによるとこれらの木桶はすでに40年近く使用されており、木特有の殺菌効果で飲料水の安全が確保されており、ほのかな良い香りがしていた。

知っていますか？

五つ星の高級ホテルであるホテルニューオータニは2棟の高層ビルを有し、毎日国内外から訪れる大勢のゲストをもてなし、便利で快適なサービスを提供しているが、同時にさまざまな生活ゴミや食品廃棄物が日々排出され、その排出量も半端ではない。では、ホテルニューオータニはどのようにこれらの廃棄物を処理しているのだろうか？



まず、廃水の処理について取り上げよう。厨房廃水は中水処理システム(見学時には、上の写真のような大きな池を幾つも目にした)を通過して排水に混ざっているゴミを沈殿させた後、中水はすでに使用可能な状態になる。ホテル内にあるトイレの便器に流れる洗浄水はこの処理された水であり、このシステムによって水資源の使用量を大幅に抑えることができています。また中水は、大ホールやタワーの屋上にある空中庭園に植えられているバラへの灌水にも使用されている。見学前には、このような場所に多種多様なバラが咲き乱れる美しいローズガーデンがあるとは思ってもよらなかった。毎日ここで使用される水はすべてホテルで処理された中水で賄われており、非常に効率の高い省エネ対策を講じている。

次にゴミ処理の工程に注目してみよう。ホテルニューオータニでは、先に建設された2つの処理室で、毎日排出される約5トンもの有機ゴミを粉砕して乾燥させた後に、発酵処理を施し有機肥料に変える。この有機肥料は工場に搬送しさらに発酵を行うことで、使用可能な有機肥料となる。これらの有機肥料により栽培された作物がホテルニューオータニに納品され、美食に姿を変えてゲストに提供される。これぞまさに有機ゴミの100%循環再利用を実現した素晴らしいシステムであり、ホテルニューオータニの環境保護への取り組みの素晴らしい成果でもある。

そして、見学途中に私たちが目にした幾つもの大きな木桶は、すでに30年以上の歴史があり、ホテルスタッフの紹介によると一定の期間ごとに、これらの木桶の清掃作業が実施されている。それゆえ長期にわたって継続的に使用することができている。またこのような貯水技術は使用周期が長く、素材である木の殺菌作用で、質の高い飲料水を提供し続けている。このシステムは中国のホテルも見習うべき立派な手本である。

感想

今回、日本における最後の見学先であるホテルニューオータニの環境保護の取り組みを見学できたことは、私たちにとって最高のフィナーレとなった。来日後の宿泊条件、衛生面、緑化環境はすべて申し分のないものであった。日本は国土面積が狭く資源も少ない割には人口が多く、いかにしてこれほどまでに素早い発展と高い文化を備えた社会の形成を実現することができたのか非常に興味深く感じていたが、今回の見学によって間違いなくその疑問に対する明快な答えが得られた。それは、人々の環境保護に対する高い認識とその理念の一貫した実践によるものである。例えば、庭園の緑化と空中庭園の建設は自然に恵まれた快適な環境を提供し、同時に中水も有効活用されている。まさに一挙両得である上にエネルギーの浪費を防いでいる。またゴミの分別と処理においては、毎日排出される5トンものゴミを100%再利用している。そして環境保護においてさらなる向上を目指し、日々改善に取り組んでいるという。これは私たちにはとても真似ができることではない。なぜなら私たちは、豊かな資源と広大な土地に恵まれているという思い込みをしており、さらにゴミの分別制度の不整備がゴミの効果的な再利用を実質不可能にしているからである。

ホテルニューオータニを見学する前に、私たちは東京都のゴミ処理施設も見学したが、皆それぞれの分野において非常に優れた環境保護活動を展開していた。ホテルニューオータニのようなホテルや企業が皆、環境保護の理念を自身の生産活動にまで徹底させているからこそ、清潔で美しく、且つ高い文化を誇る日本を形成することができているのである。私は今後の中国の発展において、中国の企業と市民が日本の環境保護とその発展の手本から学ぶことによってより清潔で美しい中国を造り、埃と塵にまみれた現状を徹底的に改善できたと願っている。

そしてこの点に関しては、私はただ理想を語るだけではなく、実際に生産活動や生活から始め、自分なりの環境保護をしていきたいと思っている。これがホテルニューオータニの見学を通して私が一番強く思ったことである。

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第12回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 清華大学

氏 名： 劉天樂

飛行機が着陸に入ったちょうどその時、海を挟んだ向こう側にある滑走路を見つめながら、ついに日本にやってきたという実感がこみ上げてきた。3時間のフライトは少し退屈で疲れも感じたが、日本に着いてから物珍しさや新鮮さも手伝い疲れは一気に吹き飛んだ。でも空港内の所々に簡体字の中国語表記があったので、馴染み深さも感じ、あまり異国にいるときのなじみの無さと戸惑いを覚えることは無かった。

当日の夕食は、空港内のホテルでのビュッフェだった。数ある料理やデザートの中で最も印象深かったのは、自分の手作りのアイスとチョコレートが食べられることだった。イチゴ味のアイスは、マクドナルドやケンタッキーのアイスのように見栄えがよく、甘くはなかったが、自分の手作りだけあってその美味しさは格別なものだった。こうして私たちはホテルで楽しいひと時を過ごすことが出来た。

食事を済ませてお手洗いにいった時、日本ならではのプロ意識と真剣さを実感した。普通の便器だが非常に清潔できちんと整っており、中国国内にあるような造りが粗末で異臭を放っているようなトイレではなかった。手洗い場の自動給水の水量も丁度良く、必要最小限の水で手をきれいに洗うことができた。このような細かなところに日本人の生活態度や生き方が現れており、またこれこそ資源や土地が限られている状況下でも高い競争力や評判を維持することができている秘訣なのだろう。

京都に向かうバスの中で、他校の生徒たちと意気投合して仲良くなれたことは、今回の訪日の最も大きな収穫かもしれない。楽しさ満載の初日はこうして幕を閉じた。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 中国農業大学

氏 名： 費書朗

今日の北京は、曇り空で時折小雨が降っていたが、私は爽快な気分と興奮が入り混じった気持ちで、帽子やジャケットそして靴からパソコンケース、旅行バッグまですべて中国らしい赤一色で決めて旅に出発した。これらの赤い品物はそれぞれ何の意図もなく別々に買ったものだが、今回の旅ではこの赤色にきっと特別な意味があるに違いないと思った。

飛行機が30分ほど遅れたこと以外は、すべてが順調だったが、実際は順調というよりも、まさにパーフェクトという言葉が口を突くぐらいに何もかもがとてもスムーズだった。初日に主催者側の用意周到なもてなしを受けて新鮮味に浸った以外に、私にとって何よりも大切なのは家族と連絡を取ることだった。空港へ向かう途中で、私は両親や親友たちに電話でお別れをして、飛行機に搭乗する前には母とボーイフレンドに最後にもう一度電話をし、大阪に到着した後もまるで宝物を見つけたかのように慌しく食事の時間も惜しんでwifiで家族や親友たちと連絡を取った。人は楽しいひと時を家族や親友たちと分かち合いたいと思うものだし、故郷を離れて異郷の地にいる時に最も恋しくなるのもやはり彼らなのかもしれない。

最後に触れたいのは、農大の仲間と一緒にとても苦労した今晚のディスカッションだ。明日は京都大学の学生たちとの交流がある。親睦会での出し物の準備以外に最も大変だったのは、今晚になって農大は明日の討論交流会のために「東アジアの経済貿易体制」という議題について準備しておくように告げられたことだ。私たち6人のうち経済関係

を専攻しているのは一人だけで、私に至っては東アジアの国家間ではどんな貿易体制が形成されているのかさえ知らない経済オンチだ。しかし農大の私たちは不屈の精神の持ち主である。たとえ夜中までかかっても、分からないことは勉強し、知らないことは調べ、はっきりしないことは相談できる。よって皆は片付けが終わった後一緒に集まって、今回の旅で最初の、また最も忘れ難い討論会を開いたのである。その後私たちの考えが次第に整理され、認識がまとまっていくにつれ、最初の五里霧中の状態から次第に霧がすっきり晴れていくような思いがした。私たちはこの経験を通して自信が深まり、そんな自分に少し感動を覚えた。その後の親睦会の出し物も、リコーダーやコーラス、B-Box (ヒップホップの一種) など、元気いっぱい中国らしいものに決まった。農大と「ジャスミン」、皆さん請う御期待！

この数日間は寝るのが遅かったが、満ち足りた幸福感が疲労の不快感を吹き飛ばしてくれていた。

日 付：5月26日（日）1日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 馬博釁

もしかしたら、初日だから書くべきことなどまだ何もないだろうという人もいるかもしれない。でも私にしてみれば、正に今日のこの日について数え切れないくらい沢山の思いがあるのだ。

初日は出会いの一日だった。6つの大学からさまざまなタイプの若者たちが集まり、総勢35名からなるグループに加わった。互いに簡単な挨拶で済ますということではなく、心から打ち解けて意気投合し、そこから友情が始まった。

また初日は変化の一日でもあった。わずか数時間のフライトで、私たちは慣れ親しんだ世界から、今ではこれまで映画や漫画でしか見たことがなかった世界にいるのだ。標識の文字が漢字からかなに変わったこと以上に、中日両国の生活態度や関心事の違いに強烈なコントラストを感じた。空港係員の心のこもった笑顔と真面目な態度から、日本人の仕事に対する真面目さと責任感の強さを実感した。そして私が最も感動したのは、空港内で清掃員のお婆さんと空港警備員が行き交う際に、互いに軽くお辞儀をして挨拶をしていたことだ。このような些細な心温まるシーンは、せわしい中国ではまずお目にかかれないものだ。

まだ初日、始まったばかりだが、色々な事を思った一日だった。しかしこの後の旅ではより多くの事が私たちを待っているのだ。

P. S 空港係員のきれいなお姉さんに話しかけられて本当に胸がドキドキしたよ！

日 付：5月26日（月）1日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 張田

昨晩は興奮してなかなか眠ることができなかった。今日の午後は1時間遅れてのフライトとなったが、でもそんなアクシデントも私は全く気にならなかった。日本に到着して関西国際空港から出た時、日本の美しい夜景に目を奪われた。深呼吸して、新鮮な空気を味わうと気分がすごく爽やかになった。

多忙な1日が終わり、みんな非常に疲れていた。しかし夕食のビュッフェは、ハードな1日をねぎらう最高のご褒美となった。細やかで行き届いたサービスを受けながら食べたい品を選ぶ。丁寧に美しく彩られた料理の盛り付け方から味わい深さまで、そのどれもに驚嘆せざるを得なかった。数ある料理の中でも私が特に気に入ったのは、見た目が美しい上に味も絶品なスイーツだった。プリンもシュークリームも食べ出すと止まらない美味しさだった。

食事を済ませた後バスに乗り、窓から見える美しい景色をみんなで堪能しながら、呂さんの詳しい解説に耳を傾けた。和気あいあいとした雰囲気の中でみんなはすぐに打ち解けることができた。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：中国農業大学

氏 名：趙未央

朝食を済ませた後、島津製作所の見学に出かけるまで時間がまだあったので、ホテル付近の路地裏を散策した。ここが京都の庶民的な生活環境なのだろう。路地に立ち並ぶ家屋の軒は低く、玄関も非常に小さい。日本の家屋が非常に可愛らしく見える。その後、皆と一緒にホテルの近くにある島津製作所跡地にある記念資料館を見学し、日本の科学技術産業と教育の発展における島津源蔵氏（初代）と島津源蔵氏（二代目）の多大なる功績について理解を深めることができた。一つひとつの完成度の高い教材は、物理現象を非常に分かりやすく説明したもので、島津製作所にみなぎる顧客への愛情を形にしたものだ。続いて私たちは、島津製作所製の医療用機器や分析計測機器の展示を見学に行き、井上統雄部長の熱烈な歓迎を受けた。科学技術、地球と人に対する島津製作所の姿勢は現代社会のニーズにマッチしたものだ。中国の一部の企業では、利益を追求するあまりに堅持すべきものがないがしろにされている。私たちは、島津製作所で従業員用のお弁当を頂いたが、そのサービスも至れり尽くせりであった。

午後には京都大学を訪問し、熱烈な歓迎を受けた。私は二年前に京都大学に出願した時のことを思い出した。今でも非常に残念でならないが、当時の中日外交摩擦が原因で入学を果たせなかった。説明会で京都大学の紹介を聞いた後、私たちと経済学部（注）の学生たちは第3グループとなり、校内の見学とその後のグループ討論会に臨んだ。私たちはあらゆる方法で、言葉の壁を乗り越えて互いに心を通わせることができ、温かさと思いやりそして互いの友好を感じた。私は、Yukariさんや山本佳祐さん、山崎将平さん、志水優剛さんと友達になることができ、この友情が今後も続くことを願っている。交流の促進こそ中日友好の最も直接的な表現方法なのだ。今日の晩餐会は大盛況で、中国側日本側双方が出し物を披露して、この素晴らしいひと時の思い出をいつまでも残すべく、みんなで記念写真も撮った。

まだまだ書き残したいことがたくさんあるが、日記帳のスペースに限りがあるのが残念だ。そうだ、晩餐会の後に京都駅に行き、居酒屋に入り、日本のナイトライフを体験できたことも収穫の一つだ。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：賈晨宇

昨晚、京都市内にあるリーガロイヤルホテルに一泊し、身体の疲れを癒すことができた。今日から本格的に日本での訪問交流活動が始まる。

今回の訪日で、まず訪れるのは島津製作所だ。私は病院の内科に勤務している私の友人の母親から、かねてより島津製作所の評判を聞いて憧れを感じていた。まず、島津創業記念資料館に行き、100年以上前に建てられた木造住宅を見ながらガイドの説明を聞き、胸が高鳴るほどの尊敬の念が生まれた。初代の島津源蔵氏は、初めの頃は一職人に過ぎなかったが、科学技術の影響を受けて教育用理化学機器分野に毅然と足を踏み入れた。島津氏は化学分野の教育を受けたことがなかったが、苦労をいとわない不屈の精神と勤勉さで地道な努力を重ねて困難を乗り越え、ついには島津製作所を立ち上げることができた。二代目島津源蔵氏は、父親の優れた資質を受け継ぎ、小学一年の学業しか履修していないが、発明によって数多くの特許を取り、日本の「エジソン」と呼ばれた。このようなひたむきな精神が島津製作所を大企業へと成長させる原動力となっただけでなく、職員一人ひとりにも受け継がれ、後に田中耕一氏のようなノーベル化学賞受賞者も生み出したのである。

午後は、日本の有名大学の一つである京都大学を訪問した。アジアひいては世界でも著名な高等教育機関として、京都大学は数多くの優秀な人材を輩出している。幸いなことに、今回私たちは京都大学の学生たちと交流することができた。私たちはまず校内の見学をし、その後教室で「中国と日本の就職状況」というテーマで討論会を行った。中国では大学四年生の時に論文を完成させなければならないので、大抵の場合論文を準備しながら企業研修を受

けることで、はじめて卒業後の職が保証される。しかし日本では、一般的に大学三年時に就職先を見つけ、一年後に大学を卒業した後はそこへ就職することができる。日本では大学新卒生があまり多くないので、彼らは幾つもの企業で採用面接に臨む機会があるが、中国の学生はほとんどの時間を企業への履歴書送付に費やしている。さらに、日本人は転職をあまり好まず、就職した企業への忠誠心が強い。日本人のこうした気質は見習うに値する。晩餐会が終了した後、私たちは準備していたプレゼントを贈り、名残を惜しみつつ別れを告げた。

日 付：5月27日（月）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：胡承蓉

今日の午前から京都での見学が始まった。バスからでも私たちは京都建築の特徴を感じることができた。家屋はどれも低く、悠久の歴史を持つ由緒ある古都である。徳川家康にまつわる史跡を通じて、明治時代の遷都の歴史や京都という地名の由来について知ることができた。

午前は島津製作所の見学に出かけ、日本の科学技術の先進性を実感した。島津製作所の分析および試験計測機器そして医療設備は、日本の先端科学技術の結晶であるだけでなく、全世界の人々に対しても多大な貢献をしている。この場を借りて、四川での二度にわたる地震の際の、島津製作所の被災地住民への設備援助に感謝申し上げたい。島津製作所の見学で最も印象深かったのは、初代島津源蔵氏、二代目島津源蔵氏そして田中耕一氏という三人の伝説的人物の歩みと功績だ。彼らは時代こそ異なるが、科学に対するひたむきさとたゆまぬイノベーションの精神は彼らすべてに共通している。杜さんの解説の中でも、田中氏の日頃の仕事に対する細部へのこだわりを通してノーベル賞受賞の必然性が述べられていた。これはまさに以前教師が私たちに語ってくれた「細部が勝敗を決する」という言葉を証明したものである。

午後の京都大学での交流では、学生たちから熱烈的な歓迎を受けた。私たちは彼らと共に日本語、英語、中国語の3つの言語を使って6つのテーマに沿って討論会を行った。我が団員の中にも優秀な人材がいて、みんな独自の観点から意見を述べ、最後にはお互いの感想を分かち合うことができた。京都大学の紹介を聞いていた時に私が特に注目したのは、大学が発表した論文の引用率の高さだ。彼らの論文は信頼性が極めて高く、データや観点の一つひとつに至るまで正確さが保証されている。私も中国で時間を惜しまずに100編近くの論文を読んだが、それらの質は京都大学の論文と比べるならまだまだ足元にも及ばない。私も今後大学院に進学した後、彼らの研究姿勢に倣いたいと思っている。夕食の後、私たちは一緒に歌い、プレゼントを贈り、そして一緒に写真を撮るなどして、この日の日程を終えた。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：中国農業大学

氏 名：顧燁

今日はまず嵐山にある周恩来総理の記念碑を見に行った。周総理の「雨中嵐山」の原文が刻まれた大きな石碑は限り無い歴史の重みを感じさせ、同時に私たちの周総理に対する敬意が再び呼び覚まされた。呂さん帯同の下、私たちは周総理を偲ぶ儀式を行い、皆は周総理への想いをしとしとと振り続ける雨に託した。

続いて、私たちは金閣寺を訪れた。これまで写真でしか見たことがなかった実物の金閣寺は荘厳で美しく、何度見ても飽きることがない見事な景観を呈していた。私たち以外にも、ちょうど日本の小中学生の団体が見学に訪れており、学生服に身を包んだ大勢の男の子や女の子は活発でかわいらしく、元気で満ち溢れており、景観に彩りを添えていた。

昼食の伝統和食は種類が豊富でどれも非常に美味しく、さらに舞妓による演目を存分に楽しんだ。

午後は引き続き清水寺と高台寺を見学した。清水寺の湧水は非常に甘くて美味しく、高台寺での茶道や座禅体験はとても興味深かったが、私にとって特筆に値するのは、座禅体験だった。浄因法師の指導の下、静かに座禅を組んで呼吸を整えると雑念が消え失せて、心が徐々に穏やかになってくるのを感じた。浄因法師の若々しい風貌とユーモアのある話し方から、座禅は人格を磨き修養を積む助けになるだけでなく、若さを保つ上でも大いに役立つに違いないと思い、座禅をこれからもずっと続けようと決心した。

新幹線はとても速く、京都からわずか一時間余りで浜松に到着した。車内で、私は中国人民大学の学生たちとゲームをして一緒に楽しい時間を過ごし、彼らとより仲良くなることができた。私は自分とは異なる考えを持つ若者たちと交流する感覚を心から楽しんでいて。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：中国人民大学

氏 名：何思源

今日はリラックスした一日だ。荷物を置いてからお気に入りの服に着替えて、小雨が降りしきる京都の街を散策し、古都の醍醐味を味わった。最初は嵐山を訪れた。車から降りると小雨が降っており、女性の多くは傘を差しながら小雨と共に霧が立ち込める嵐山を散策した。美しい景観には必ずと言って良いほど旧跡がある。嵐山の中腹には、周恩来総理の記念碑がひっそりと立っている。霧雨で周辺が霞んでいる中、傘を掲げて故人をしのぶ。日本で故人をしのぶ機会を持つことができたのは実に素晴らしいことだ。最後に、私たちは総理の記念碑の前で三度お辞儀をして、偉大な先人に対して敬意を表した。

次に訪れたのは、金閣寺だ。日本の景勝地はどこもこじんまりとしていて、広さが数平方キロメートルもないが、どの景勝地も優雅で美しい。美しい緑に覆われ、金色に光輝く金閣寺は、重厚な趣を備えた歴史ある寺であり、何もかもが美しい。とりわけ特筆に値する点は、金閣である。金閣は三層に分かれ、至るところに金箔がはりめぐらされており、何百年にもわたって金色に輝き続けている。その頂上に飾られた金色に輝く鳳凰は、金閣寺の古寺としての風格をより引き立てている。

最後に訪れたのは清水寺と高台寺だ。二つの寺が持つ趣の組み合わせは、耽美的なイメージを私たちに抱かせる。住職の主催による茶道体験に、私は日本が古来より育んできた「道」の真髄を間近で味わうことができた。その作法、美しさ、優雅な補佐役の女性、そして冷たく爽やかな緑茶の風味、このひと時は、まさに無上のものだ。

日 付：5月28日（火）3日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：鄧沛捷

丸一日かけて古都である京都を観光できるのは、本当に幸せなことだ。丁度雨が降り、霧が立ち込めている様は、「南朝四百八十寺、多少楼台烟雨中（南朝の四百を超える寺にある楼台の多くがぼんやりと春雨に霞んでいる）」という古代の漢詩に出てくる情景を彷彿とさせるものだ。

金閣寺は非常に美しく、清水寺も実に素晴らしかった。ただ嵐山がかなり政治化されており、周恩来総理の石碑一つでここまで形式主義になってしまうとは、全く残念でならない。

一方高台寺での茶道と座禅体験はとても興味深かった。日本の茶道は、「清静和寂」を追求し、その心境は「一期一会」である。中国にも「君子之交淡如水（君子の交わりは淡きこと水の如し）」ということわざがあるが、そこにはまさに「清静和寂」の精神が表れている。私利私欲無く、さらに純粋な心、これによりはじめて真の友情が生まれるのである。しかし残念なことに、今の世の中は物欲で溢れ、人は互いに利用し合い、純粋な友情はほとんど見かけなくなってしまった。もし明日世界が終わりを迎えるとしたら、私は最後の一日をどう過ごすのだろうかと思案するが、答えは見つか

らない。「無常」という仏教の概念を持つ日本人も長きにわたりこの問題の答えを模索しているに違いない。もしかしたら「一期一会」こそ答えなのかもしれない。他人との出会い一つひとつを大切に、一つひとつの体験を大事にし、悔いを残さない。こうする事で或いは「死を受け入れる」ことができるのかも知れない。

そして座禅はさらに得難い貴重な体験だった。背筋を伸ばして両足を内側に折るようにして座り、両手を円型に組んで静かに膝の上に置き、精神をこの円に集中するのだ。頭をわずかに下げて視点を一メートルほど前に合わせるとお釈迦様と同じ眼差しになるという。この時に呼吸を整える必要があり、ゆっくりと呼吸を繰り返す。一度の呼吸につき心の中で一つずつ数え、三十まで数えたら、また一から数える。見たところ簡単そうかもしれないが、精神が集中できていないと、いくつまで数えたか忘れてしまうのである。以前は座禅は単なる瞑想だとばかり思っていたが、まさか呼吸のサイクルを保つだけで無の境地に達することができるものだったとは知らなかった。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：清華大学

氏 名：楊思謙

今日は訪日4日目、これまでで最もリラックスできた。なぜなら今日の晩はゆっくり温泉に入ることができたからだ。しかし温泉に入るまでは、非常に疲れていた。今日は朝6時半に起床したため、多少寝不足のまま午前中は静岡県農林技術研究所と農林大学校を訪れた。仲間の学生たちが農業について多くの質問をしていることに私は驚いた。なぜなら、私たちのグループには農業を専攻している学生はいないにも関わらず、質問内容は専門的で、また解説スタッフと専門用語を交えながら交流していたからだ。私は皆の博識ぶりに驚きを隠せなかった。もちろんこれは素晴らしいことだ。最近の自分は運が良い気がする。昨日は、和食を食べている時、ちょうど舞妓たちによる演目を観賞することができたし、今日は、農林大学校の学生たちが体操をしているのを目にした。彼らの体操を見た瞬間、私は中国のラジオ体操第Nを思い出した。そして中国と日本の体操の違いを見た。彼らはなんと雨が降ったばかりのセメントの地面で腕立てや腹筋などの運動に一生懸命取り組んでいたのだ。その後私たちは、農業大学二年生の学生たちと花摘みを体験した。咲いた花を摘む作業だが、摘んだ花は二つで成功率は100%、少し嬉しかった。

昼食の後、ハウス食品の製造工場を訪問し、工場内の現代的な生産ラインを見学した。工場では先端技術が取り入れられており、生産されている主な商品はカレーで、幅広い人々の好みに応じた多種多様なカレーがあった。中国人にとっては食べ慣れない不思議な味わいで、あまり口に合わないと思った。しかし工場からカレーを一袋ずつ頂いても嬉しかった。その心遣いに感謝している。

ハウス食品を見学した後は、待ちわびていたリラックスタイムだ。三時間ほど車に乗り、箱根にあるホテルに到着した。車での移動中に本来なら富士山が見えるはずなのだが、残念ながら天気が悪かったので富士山は少しも見えなかった。今後の日程で富士山を見る機会がある事を願っている。せっかく日本に来たのに富士山が見られないのは、中国に来たのに万里の長城が見られないようなものだ。それは残念以外の何物でもない。

温泉を満喫した後は、パーティーをして楽しく過ごした。事前に出し物を準備できなかったので場当たりのになり、大した思い出になるようなものでは無かったかも知れない。

何はともあれ、今日も一日楽しかった。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：中国人民大学

氏 名：江天雨

どの国においても、農業は最古であると同時に最新の産業だ。なぜ古いかと言えば、農業の起源と人類の営みは常に密接な関係で結ばれており、農業の発展は、太古からの人類文明の発展史を物語るものだからだ。またなぜ最

新かという、現代の工業社会において、農業は依然として最先端科学が注目する分野であり、今日、農業は日進月歩の発展を遂げ、新方式や新技術が農業に新たな命を吹き込んでいるからである。

日本は小さな島国であり、土地や資源は乏しいが人口密度は高く、山地面積は比較的広い。それゆえ、日本では農業をいかに発展させるかが重要な課題となっている。今日の静岡県農林大学校および農林研究所の訪問を通じて、限られた資源の有効活用こそ農業生産力の最大化における鉄則だということを強く認識した。例えば、メロンを植える際には同時に養蜂も行い、蜂蜜という副産物だけでなく、人の手を使わず効果的に花粉を媒介させることができる。茶葉の栽培は、山が多い日本の地形に適しており、国にとって大きな収入源となっている。

私は政治学が専攻なので、農業分野の技術的な問題についてあまり明るくないが、静岡の農業に対する考察が今日の日記のメインテーマとなったのは、効果的な制度の活用によってどのように農業や経済の成長を保障するかという自身の専攻学問への思考を促してくれたからである。農林大学校および研究所の訪問中、農業支援の問題について教授は、農家への支援は一連の制度保障に依存しているが、中央政府から地方自治体にかけて複雑に構成されていることに言及した。これには私は中国の行政制度の農業への制約について考えずにはいられなかったが、私は中日両国間の具体的な制度上の相違についてより理解したいと思うようになった。「学思並進(よく学びつつ熟考する)」とは恐らくこういうことなのだろう。

日 付：5月29日（水）4日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：銭童

今日、私たちがまず訪れたのは静岡県にある農林技術研究所だ。郊外に位置しているので、現地に到着して車を降りると新鮮な空気が辺りに満ちていた。研究所の職員から静岡県の農業について説明を受けた後、温室と主要作物の生育状況の見学に行った。国内で主に採用されている生産と研究を組み合わせるスタイルとは異なり、この研究所では専ら研究に重きが置かれている。土を使用しないバラの栽培や丈夫で真っ直ぐに育つガーベラ、「静育一号」と呼ばれている高級メロンは、すべて非常に印象深いものだった。日本では環境保護や節約の意識が至るところまで浸透しており、農業も例外ではない。研究員たちは農作物のさらなる品質の向上や賞味期限の延長のみならず、農薬使用の削減と生物を使った害虫駆除方式による病害虫予防を研究している。このことは強く印象に残った。

次に向かったのは、今日私たちが一番楽しみにしていた箱根温泉だ。日本の温泉の故郷という名にずっと憧れを感じていたが、今日ついに念願がかなった。「天成園」に到着後、目の前に広がる光景に皆興奮した。早速部屋に入って浴衣に着替え、今晚の「特別イベント」に胸を躍らせた。この夜は私たちの期待通り楽しいものとなった。美味しい懐石料理に加えて、各大学の学生たちが、それぞれバラエティーに富んだ出し物を披露し、皆を驚かせてくれた。この時ある学生の「このような豪華な温泉旅行は、今後お金を貯めればまた体験できると思うが、今日のように六つの大学の仲間たちと一堂に会して楽しく過ごせる機会は、或いはもう無いかも知れない」という言葉は私の心の琴線に触れた。パーティーが終わると、気分が大いに盛り上がっている私たちは、一緒に温泉に入ることにした。「裸の付き合い」にはとても気恥ずかしく感じたが、皆で一緒に露天風呂に入るとすぐに気にならなくなった。温泉につかって一息つくと、心と身体が一新されたような気がした。

次回訪日した時も温泉には必ず立ち寄りたいと思う。

日 付：5月30日（木）5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：王珏

日本での充実した旅行も5日目を迎え、狭い路地や挨拶時のお辞儀、きれいな空気にも慣れた。日本は実に住み

心地が良い国だ(仕事上の重圧さえなければの話だが)。この数日間の見学を通じて最も印象深かったのは、日本人がいかに効率よく資源を活用しているかということである。限られた資源が日本人にリサイクル意識と他人(公共)への思いやりを形成させたのである。

その事実を証明するかのように、まさに今日私たちが見学したテルモと住友商事はCSR(社会貢献活動)に力を入れている。両社はいずれも長い歴史を有し、世界的な規模と華々しい業績を誇っている。両社のこうした特徴と彼らの持続的発展の維持は、きっと大きく関係しているに違いない。そして、私は今日初めて総合商社について学ぶことができた。日本独自の企業形態だが、経済を専攻していた私も総合商社については理解していなかった。総合商社は日本経済の成長を支える役割を担っている。その総合性によって、各業界の架け橋となって一体化を実現したり、海外市場を開拓したり、また世界環境の変化にも順応している。私は、総合商社が日本独自の形態であることは日本の体制や文化とは切り離して考えられないと思う。日本人は自発的に国の発展という視点にたち、国全体の利益を考えることができるのに対して、中国では国が企業(特に国営企業)のために考慮することの方が、企業の国に対するそれよりも断然に多い。私はこの点を中国企業は日本企業に学ぶべきであると思う。

そして住友商事は「飲水思源(水を飲む者は、その源に思いを致せ)」という理念を掲げている。これはつまり一種の感謝であり、自己反省の態度である。企業であれ、国家であれ、また一個人であれ、私たちはみなこのことを肝に銘じ、くれぐれも忘れるべきではない。

日 付：5月30日(木) 5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：費書朗

昨夜も遅くまで忙しかったが、今朝も頑張って6時半に起床した。なぜならこの山間部に位置するホテルと周囲の景色が実に美しいので、少し早めに出かけて写真を撮りたかったからだ。このチャンスを逃してしまうと今後こんなにきれいな景色に再びめぐり合える機会は訪れないかもしれない。だからこそ今、この時を大切にしたい。

午前中はテルモを見学し、彼らが開発した最先端医療シミュレーション施設について理解を深め、さらに手術の疑似体験をすることができた。日本企業に対して私が強く印象に残ったのは、彼らが物事の細部まで重視しているところだ。ヒューマニティーに富み、利用者各々に対して配慮がなされている。例えば、テルモ製の注射針は、引き抜く際に蓋が自動的に閉まるように設計されており、これは処置の際に生じうる看護師への感染を防止するためのものである。テルモによるイノベーションはまさに驚嘆すべきものであり、特に心血管疾患の治療における技術は非常に先進的である。

午後は住友商事を見学した。彼らの業務範囲の広さに驚いた。説明担当者が冗談を交えて、「当社で扱っていないのは麻薬と銃器くらいです」と語っていたが、これほどまでに広い業務範囲をしっかりとカバーできているのは、彼らが管理から技術に至るまですべてにおいて秀でていることの証しだ。彼らの「変化への対応能力を常に維持する」という経営理念は、個人であれ集団であれ、社会で生き、発展を遂げる上での真理を物語っている。

住友商事の見学で最も印象に残ったのは晩餐会で、住友商事に勤務している中国人社員が私たちに同伴してくれたことだ。彼らはみなプロ意識が高く、とてもフレンドリーだった。異国の地で同胞の友人と一緒に食事をしながら歓談することができ、私は気持ちが高ぶっていくのを感じた。私のそばにいる王建偉さんは来日して25年になる。長年の共産党員である上に、聞いた話によると現在の中国外交部の部長が当時、共産党へ入党する際に彼が紹介人を務めたそうだ。彼は優しい物腰でこの数日の活動や日本に対する印象などについて尋ねてきた。私たちが日本に好感を持っていることを伝えると、彼は日本と中国の差を見て祖国を否定したりしないようにと忠告してくれた。それを聞いて私はすごく感動した。なぜなら私もこの数日の間に同じことを考えていたからだ。私たちがこうして訪日している目的は、日本を知りつつ日本と中国の差が何かを見分けて熟考し、祖国の発展のために貢献することだ。今日、テルモで職員の方々と交流した時、彼らは「日本も2, 30年前ひいては10年前でさえ今ほど環境は良くなかった」と言っていた。

発展の途上において模索せず前に進める人などいるだろうか？こうして私は、今の中国が発展の途上で直面している問題も今後の発展のためには避けて通れない一過性の問題に過ぎず、発展の先には輝かしい未来が待っているという確信が得られた。

日 付：5月30日（木）5日目

大学名：中国人民大学

氏 名：趙曉晴

Day5@東京

今日一日が終わって、突然医学を学びたいという衝動にかられた。今日の体験は実にいつもとは違うものだった。これまでの企業訪問はただ見学のみだったが、今日はテルモで機器の操作を体験することができ、見学はより忘れ難い思い出になった。

模擬体験の際に、初めて「看護師」になって「患者」に注射を試みたが、一発で成功した。また初めて心臓血管手術を生で見た。もちろん手術の対象は人体ではなくブタなのだが、それでも私にとっては非常に衝撃的だった。そして思わず考えさせられたのは、日本で患者の痛みを減らすためのさまざまな方法が研究開発されている時にも、中国では、有名な病院を含むほとんどの病院で激痛や大きな危険が伴う手術が患者に施されているという現実である。

資金力や技術力において、私たちの国は先進国である日本と比べて多少の遅れをとっているとは思いますが、その主な原因は科学技術に対する理念に起因しているのかもしれない。同時に、その資金力や技術力と科学技術に対する理念のどちらにおいても重要な、創造力や実践力の差についても深く考えさせられた。

今日の晩餐会で、日本の企業の方々や、東京での私たちの滞在がより楽しいものとなるように、美味しい食事と美しい景色を私たちのために準備してくれたことに感動を覚えると同時に、どんなことにも真面目に取り組む彼らの姿勢にも驚かされた。

お酒をたしなみながら東京の美しい夜景を楽しんでいると心が落ち着き、とても気持ちが良かった！

P・S 今日テルモでホストファミリーの西山さんに会った。本当に良い人で、中国語も上手。ホームステイへの期待がますます高まった！

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：中国農業大学

氏 名：凌晨

今日のメインは三井化学と新日鐵住金君津製鉄所という大規模工場の見学だった。今日の見学を通じて日本の工業の発展ぶりと現状を深く知ることができた。もちろん日本が発展を遂げた理由について自分なりに分析してみた。

最初に私たちが訪問したのは三井化学市原工場だ。この工場では、主にエチレンとエチレン派生物から化学工業材料を生産している。工場自体は東京湾の海辺に位置していることから交通や輸送の便が非常に良い。全体的に強く印象に残ったのは、三井化学の協力姿勢とイノベーション、もう一つは生産面での安全と環境保護に対する高い基準だ。まず前者について触れるが、市原工場内では三井が経営母体の会社と合資による会社の両方が存在しており、互いに発展しつつも友好的な関係を維持している。このような経済的で効率的な生産配置は、私たちが学ぶべきところだ。また後者においては、工場の建設以降現在に至るまで事故は一度しか発生していない上に、有害なガスや液体の排出はゼロに近い。これには感服させられた。

新日鐵住金の見学は、過ぎ去った歴史をしのぶ興味深いものだった。私たちが歩いたルートは、まさに当時、鄧小平が見学した時のルートであり、彼が新日鐵の工場を見学した時に覚えた感慨を私たちは想像してみた。この工場を見学した時、きっと彼は科学技術面での中国と日本の差を痛感させられたことだろう。しかし今日の見学を通じて私た

ちが痛感させられたのは、企業の社会的責任に対する自覚の差だ。現在の中国は大きな企業も高い科学技術力も有しているが、社会的責任に対する自覚が欠如している。中国が現発展段階からいかにして更に一段階上がることができるのか、日本企業は私たちの模範であるといえる。

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：陳亦行

化学はかつて私の興味の対象であり、そして夢だった。化学反応を通じて一つの物質が別の物質に変わり、透明な液体が色とりどりに変化し、様々な匂いを発散し、自然に発熱や降温をする・・・私たちが生活の中で使用する材料にはいずれも化学的性質があり、それはすべての人に個性があるのと同じだ。三井化学は夢の工場のように原料を多種多様な製品に変幻させ、様々な特性を持たせる。また新日鐵住金工場は銑鉄を鋼に製錬する場所だ。そのままで使えない銑鉄を精錬して様々な鋼材にするのは、本当にすごいことだ。

しかし、私が化学工業への夢を諦めたのは化学工場の環境が一般的には身体に有害で、慢性病を患うことを恐れたためである。それは一種の目に見えない悪魔で、匂いだけでも人をたまらなくさせる。しかし、三井と新日鐵住金はいずれも従業員に対して100%の責任を負っており、効率的な休暇と交替出勤制で長時間の有害物質との接触を避け、また定期的な健康診断を行っている。特に新日鐵住金の現場従業員に対する2週間に1回の検査は非常に高い頻度だ。そして緊急事態が発生した時のために、緊急用救急車も用意されている。こういった様々な保障にも日本人の真面目さと、人命を最重視する考え方が表れている。

日 付：5月31日（金）6日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：潘璟

早朝車に乗り、東京から千葉県にある三井化学を訪れた。東京湾の景色は現代的な科学技術とマッチし、石油から各種の化合物生成プロセスまで、私はここが単なる工場であるだけでなく、企業の発展の縮図でもあることに気付いた。製造コストから物流、更に市場での販売まですべてが非常に完備されており、非常に興味深かったのだが、長ズボンを履いていなかったため工場を見学できなかったのは実に残念だった。

三井化学が私たちのために心をこめて用意してくれた昼食をいただいた後、午後は新日鐵住金を訪れた。ここは住友グループと共同出資した企業だ。私たちは専用の作業服に着替え、ヘルメットを被り、鄧小平もかつて視察した道を歩いて、工場の実際の製造ラインの作業プロセスを見学した。作業場の温度は非常に高いが、外は私たちが初めに思っていたほど熱かったり、あるいは濃い煙が充満しているような事は無く、非常に緑化が行き届いていて、多くの小学生と一般人が見学に来ていた。私たちも構内機関車や高炉の前で写真を撮った。北京798芸術区に比べるとよりリアルで、更に心を打つものがある。そしてここでは廃棄物のリサイクル、汚染防止、そして発展と同時にヒューマナイズされた環境を絶えず追求し、自然を守り、調和した発展をするといった多くの啓発を私たちにもたらした。

夜に私たちは銀座に行き、ビュッフェ式の焼肉を食べ、都心商店街の賑やかさを体感した。そして訪問日程も半ばを過ぎ皆はますます仲良くなり、食べながら雑談したりと非常ににぎやかだった。夜の東京は涼しい風が吹いていた。私たちが一緒に異国で過ごしたこの数日のことは、永遠に忘れないだろう。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：中国農業大学

氏 名：聶車暢

今日は一日非常に楽しんだ。私はとても良い家族に出会った。優しく賢いお母さん、温厚で博識のお父さん、美しく開放的でアメリカの少女のようなエリナ、格好良く頭の良いトモヤ、それから14歳の可愛いCOZY。この一家がとても好きになった。

私がホームステイするこの家庭は典型的な日本家庭ではない(not very Japanese)。9歳の時、彼女たち一家は米国に引っ越し、その10数年後、やっとまた日本に帰り、大阪や京都に2年間住み、東京に来てからはまだ2年経っていない。だからエリナはちょっとアメリカナイズされている。

午前にお母さんとエリナが私を迎えに来てくれた。私たちは先ず原宿に行き、そこで喫茶店に入って行動予定を計画し、その後長い表参道を歩いて、渋谷区の明治神宮を訪れた。その間に多くのお店をのぞき、気に入った小物を買うことができた。多くの工芸品店の品物は、皆とても精巧で民族色に富み、とある「キャラクター」ギフトショップにはたくさんアニメのガレージキットがあり、最も私が引きつけられたのは眼鏡の形になったカメラで、携帯に便利で見た目も良い。

4時になると、お母さんは先に地下鉄に乗って帰宅し、私とエリナは浅草に行った。浅草寺は中国のお寺とはスタイルが全く違い、黒と赤が寺院の古風な質朴さと重厚さをより引き立たせている。スカイツリーは浅草から非常に近いので、エリナは私を連れて上空から東京の全景を見せようと考えていたのだが、お母さんが私たちに6時前に家に戻るよと言っていたので、私はできるだけお母さんを心配させないようにと、地下鉄に乗ってエリナの家に行った。

目黒区の一戸建ての家並みはアニメの中から飛び出して来たようで、狭い路地、低い門、2階あるいは3階建ての小さな建物は精巧でコンパクト、それが私の第一印象だった。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：中国人民大学

氏 名：趙歆悦

期待、緊張、興奮などが入り混じった中で、私たちはホームステイの日を迎えた。

朝、私たちは早々と起床し、荷物を片付け、皆で一緒に日中経済協会を訪れた。会議室の中で、私たちは売り出される商品のように、ホームステイ先の家族が私たちを迎えに来るのを待っていた。その時、誰かに迎えが来る毎に、他の人たちは拍手しながら、心の中では「私にはいつ迎えの人が来るのだろう」と指折り数えていた。それから50分ほど経って、やっと私はホームステイ先の高橋さんの迎えを受けた。

高橋さんのお宅は秋葉原近くの千代田区にある、4階建ての一軒家だった。実を言うと、高橋さんの家に着いたばかりの時、私はこの東京の賑やかな場所にある4階建ての一軒家に驚き、心の中では「こんなにお金持ちの家庭だと、なかなか付き合い難いのではないだろうか」と考えてしまったが、その後私は余計な心配だったことに気がついた。高橋さん一家の生活は豊かだが、細かなところでは、やはり彼らの節制と控えめさを感じることができた。高橋さんの奥さんは日本に定住した中国人だったので、意思疎通で言葉の障害は全く無く、これは私にとって非常にラッキーだった。

本格的な日本式の昼食を体験した後、高橋さん一家は私を浅草と台場に連れて行ってくれた。台場に着いて、私は初めて世界には3つの自由の女神像があり、しかもその1体が日本の東京にあることを知った。万卷の書を読み、万里の道を行くという言葉のとおり、自ら体験すれば予想外の多くの知識が得られるものだ。

夕食は高橋さん一家が台湾式しゃぶしゃぶ鍋を食べにつれて行ってくれた。中国式のしゃぶしゃぶ鍋なのだが、とても美味しかった。

今日、高橋さん一家の控えめさと親切さに触れ、台場の美しい景色、台湾式しゃぶしゃぶ鍋の美味しさ、これらすべてが私の旅の特に忘れ難い「財産」になった。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：李佳玉

今日はホームステイの日だ。朝から、私は複雑な気持ちを抱いて集合場所に向かった。なぜなら私は生まれてから、他所の家に泊まるのはこれが2回目だったからだ。私は小学生の時に友達の家で1回泊まった以外、これまで一人で知らない場所に行き、他所の家庭に泊まったことは無かった。だから、両親も非常に心配していたし、私自身もとても緊張と不安に駆られていたのだが、同時に日本の一般家庭の生活を体験できることに非常に期待もしていた。

午前9時過ぎ、澄川さん一家が私を迎えに来た。彼らは私を連れて東京都内の観光に出かけ、そして浅草寺を見に行った。当初から澄川さんは私に気楽に、細かい事を気に掛けず、緊張しないでとずっと言ってくれたことに、私はとても感激した。なぜなら私の性格は多少内気なため、会ったばかりの人に対してどのように接したら良いかも分からず、それで少し緊張していたからである。しかし澄川さん一家はとても親切で心優しく、すぐに私は安心することができ、そして私はすぐにこの一家が好きになった。これが私の一番印象に残った部分である。

またスカイバスに乗って観光した時に、私は澄川さんと色々おしゃべりして、東京の状況についてより理解を深めることができた。澄川さん宅への帰り道で、私は一家と一緒に夕食の食材、朝食のパン、銅鑼焼きなどを買った。東京の有名な「ウサギ屋」にも行った。その他に、JR中央線に乗ったり、また夕食でタコ焼きを食べたりと、私にはすべてが初体験でとても楽しく、貴重なものだった。

一日の中で、私が最も印象深かったのは、やはりこの家族の誠実さと親切さだ。これには、カルチャーギャップが狭まっているのを実感した。人と人の心の交流こそが最も大切だと思った。

日 付：6月1日（土）7日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：蒙宛璐

今日は朝早くから興奮した気分で日中経済協会を訪れた。私のホームステイ先の家族は比較的早く来たので、私が出発したのは3番目だった。ホームステイ先の家族に会うまで、私はとても緊張していた。中国で初対面の人の家を訪問するのでさえ私はとても緊張するのに、まして今度は異国で日本の人の家を訪問するのだからなおさらだ。だがホームステイ先の金清優子さんと彼女のお父さんの金清博文さんの顔を見て、私はすぐにリラックスできた。先ず私たちは電車に乗り、上野公園近くの文化センターに行った。文化センターで私は科学博物館、風俗博物館、また文化芸術館を見学した。科学博物館内の3Dによる人類の起源を紹介する展示室はとても印象深かった。その後、上野動物園で私は生まれて初めてジャイアントパンダとシロクマを見る事ができた。昼食は串焼きだった。昼食後に私たちは表参道でお母さんの金清典子さんに会い、お母さんは私たちと一緒に原宿の竹下通りに行き、その後、私と優子お姉さんは明治神宮に行った。そこで私たちは滅多に見られない日本の伝統的な結婚式を見ることができた。渋谷では、私は最も行きたかった交差点を探し当てた。夜には金清さん宅でお母さんが作った美味しい鶏の唐揚げを食べ、食後は中日両国の違いについてたくさんの事を語り合い、楽しい一日はこうして過ぎていった。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：清華大学

氏 名：楊月

眼を開けると、そこは見知らぬ、しかし温かな雰囲気の部屋だった。見慣れない部屋ではあるが、家庭特有の温もりの雰囲気に満ち溢れている。9時までたっぷりと寝て、この数日で費やした体力を補充した。朝食の食卓では世間話をし、お父さんが語る台湾での生活と日本の習慣の話を聞き、まるで時空を越えて普通の日本の高校生の身体に乗り移ったようで、この全てがごく平凡な日常そのものだった。

その後、お父さんが車で私たちを浅草まで送ってくれ、途中ではわざわざ回り道をして、私たちに東京タワーを撮影させてくれたり、東京湾を見せてくれたりと、その思いやりには本当に感動した。浅草には目が眩むほど様々な小さなお店があり、私は思い切って家族や友人へのプレゼントをたくさん買い込んだため、昨日からの出費の合計が1万円以上に達してしまった。物価の上昇により、お金はますます値打ちが無くなった事を嘆きながら、やはり儉約に努めて、不必要な出費を避けなければと思った。浅草と浅草寺に別れを告げ、私はまだ古典的な静けさの雰囲気の中に浸りつつ、スカイツリーを訪れた。ツリー全体が銀色に燦々と輝き、雄壮にそびえ立ち、ツリー内のショッピングセンターはまた黒山の人だかりで、様々な軽食、玩具、記念品があって、女性にとっては中へ入ったら2時間は出て来られないのだが、残念ながら時間が迫っていたため、帰りの電車に乗らざるを得なかった。

ホテルに帰ると買ったプレゼントを片付ける間もなく慌ただしく一階に降り、聖地巡礼のような気分で秋葉原に行くのを待った。移動中、私はホームステイ交流会の話に完全に入り込むことができず、また呂さんの説明を聞く余裕もなく、目的地に着くと喜び勇んで下車し、学友を引き連れてあちこち歩き回ったのだが、いざ買い物の際は逆に何から買えばいいか分からなくなった。

様々な訪問や見学日程が続く中、この2日間はやっと十分な休息がとれ、日本の日常生活と習慣を深く体験した。今夜はインスタントラーメンを食べたのだが、これが意外にも非常に美味しかった。今後の残り少ない日々で、私の日本での経験もますます充実し、そして多彩になることだろう。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：馬博飢

私のこの2日間は驚喜の連続で、ホームステイの2日目に、私は菅納さんが私のために用意したもう一つのプレゼントである関東企業剣道選手権大会を見に行った。私は自分が武道館でこのようなハイレベルの試合を見ることができるとは思ってもみなかった。午後、私たちは江戸東京博物館を見学した。江戸から東京への歴史の変遷について理解し、そして集合の時間となった。

この2日間で、私は家庭の温もりを体感し、菅納さんが私のためにわざわざ準備してくれた興味深い観光コースは、私の多くの願望を現実にしてくれ、そして菅納夫人の行き届いた配慮は、更に私に自分の母親を思い起こさせた。菅納夫妻の2人の息子さんたちはいずれも別の都市で就学と就職をしていて、菅納夫人は私と朴先輩の訪問はまるで2人の息子たちが帰って来たようだと言っていた。2日間の時間は長くはなかったが、とても貴重だった。

菅納さんは1日目の夕食の前に、入念に保管していた大学生訪日団報告書を見せてくれたが、それは先輩たちの回のものだった。私は菅納さんがこの日記をご覧になるかどうか分からないが、もしその機会があるなら、一言言わせて下さい。「たいへんありがとうございました。私のために準備していただいた東京の旅を私は一生心に刻みます。もし私が日本に留学に来ることができたら、またお邪魔させて下さい。」

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：関夢露

私を受け入れてくれた日本の家庭は、いつもこのようなホームステイを受け入れている家庭だった。だから何をするにしても、彼らは非常に経験が豊富だった。私が何を買いだたいか伝えと、彼らは非常に良く理解していて、また私に以前の人たちが何を買ったかも教えてくれた。しかし人にはそれぞれ違いがあるように、それぞれの希望もまた違っているのて、毎回の受け入れは新しい体験であるのだと云う。

今日の触れ合いの中で、私は日本人と中国人ではやはり多くの違いがあることに気付いた。比較的に細部にこだわらない中国人と、きめ細かな日本人は、同様にお客さんに対してちょっとした不満を言うことは無い。しかし日本人は相手に自分の習慣がどのようなものかを間接的に知らせる。また、受け入れることができる事については沈黙を守る。

その後、彼らは私をホテルまで送ってくれ、私たちは秋葉原でのショッピングツアーを開始した。秋葉原も、その隣の御徒町も、私は非常に特色があると思った。オタク男性と電器の秋葉原は、テレビで見た日本を如実に感じさせた。そして御徒町は雑貨の集散地に似ている。ここは私が中国で全く知らない、また関わったことも無いところだった。私は「日本」にもいろいろな業種があり、それぞれ自らの特色を持って1つの国を形成しているのだと思った。中国と同じように、すべての人々には皆違ったニーズがあり、そしてそのようなニーズを満たすために、特色ある様々な業種が生まれるのである。

日 付：6月2日（日）8日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：銭童

今日はホームステイの2日目だ。前日の夜はお父さんたちと遊びに行くコースを相談した。日程の最初は千葉県北部にある「房総のむら」だ。そこは江戸時代の武士と農民の生活風景と建築を再現した風景村で、またしばしば大河ドラマの撮影地にもなっている。そこで私は伝統的な菓子作り、ろうそく作り、下駄とかんざし作りを見学し、また武家屋敷の中では昔のお姫様の服装を試着した。情景を完全に再現しているため、その中に身を置くとまるで昔の江戸に戻ったようだ。他の観光地とは違って、ここは昔の文化を保護し、より多くの人々に昔の農民と武士の生活を理解し体験してもらうことに重きを置いているため、各種の体験料金も非常に安い。今後千葉県にホームステイする人がいれば、ここはとてもお薦めです！

午後、私たちは「ワンダー・グー」という巨大ショッピングセンターに行った。巨大ショッピングセンターと言うのは正にその通りだった。そこでは様々な思いもよらないような商品が一緒に売られており、私は以前最も好きだった漫画の本をかうことにした。しかし、私が別の物を見ている間に「お父さん」がすでにお金を払っていて、私へのプレゼントだと言う。池田家に泊まった2日間には、このような驚きと喜びがたくさんあった。

最後に私たちは車で浅草寺に向かった。あの有名な「雷門」の二文字を見て、私は感激を覚えた。だがその後で携帯電話の電池切れに気付き、おまけにカメラは車の中・・・これは現時点での「人生最大の遺憾」の一つになってしまった。でも私は浅草で「大吉」のおみくじを引き当てたので、早く運が向いて来るようお願いしたいものだ。

2日間の時間は本当に瞬く間に過ぎ去り、お付き合いした時間はとても短かったが、池田家のお父さんとお母さんの私への親切なもてなしには本当に感動した。今後また日本を訪れ、お二人に再開する機会があるよう願う。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：清華大学

氏 名：李健

みずほコーポレート銀行と早稲田大学

午前のみずほコーポレート銀行での解説は、私のように銀行の経営モデル、日本の政策や国情に疎い理工系学生にとっては本当に理解が難しく、「アベノミクス」と日本経済の解説は本当に奥が深く、その中の原理は全く理解できないどころか、逆に自分の中で多くの問題が生まれた。

午後の早稲田大学との交流は非常に常識を超えていて、先ず初めに一人の風変わりな先生が全く何の紹介もせず、私たちと多くの話題について討論し始め、私たちに早稲田大学の理解し難い大学運営理念と人材理念をたくさん語ったのだが、しかし私は教授の終身制、また論文数によらない教員の査定方法には好感を持った。質の高い論文の発表は数年あるいは数十年の努力が必要であり、本物の科学者が取り組むのは正に「三年鳴かずとも、一鳴きで世間を驚かせる」プロジェクトである。それに対し中国国内の学术界は極めて名利を求める風潮が強く、教授の名のためにどうしても大量の論文を発表しなければならず、論文の質はおろそかにされ、本当に質の高い論文は国内では非常に少ない。

同時に、得るところが大きかった言葉がある、それはすなわち責任を負った自由という言葉で、私に自由の二文字を再認識させた。1990年代生まれの世代として、私たちは自由が必要だと常に叫んでいるが、自由を追求しようとして、逆に自由の前提となる責任を負うことを忘れがちである。責任を負わない自由は一つの災いである。自由は必要だが、それ以上に責任を負うことを学ばなければならない。「責任を負った自由」は最も中国の若者に教えるべき観念である。いったいどれほどの中国人が自由を追求する際に自分を見失い墮落していったことか、またどれほどの中国人が自由を追求する際に他人（特に自分の身内）を傷付けたことだろうか。現在の中国の多くの問題は詰まるところ、そのほとんどが国民の責任感の喪失、責任を負いたがらない、結果に対する責任を負おうとしないことに起因している。「責任を負った自由」の考え方を小さい頃から子供に植え付け、このような考え方を国民の脳裏に根付かせ、さらには血液に浸透させなければならない。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：中国人民大学

氏 名：陳樊駿

銀行は多くの数学、金融を学ぶ学生が夢に描く勤務先だが、今日の企業見学は日本の著名なみずほ銀行だった。銀行業務の特殊性ゆえに、実際に銀行の具体的業務を見学したわけではなく、会議室で関連する紹介とセミナーを聞いただけだった。しかしごく短いセミナーで私たちが得た収穫は多く、みずほ銀行の研究部門はデータの収集、処理と分析を通じて、日本の経済状況と関連経済政策を詳細に解説し、私のような金融専攻でない学生も多くを学ぶことができた。

みずほ銀行に別れを告げ、私たちは名門早稲田大学を訪れた。早稲田大学の教師や学生たちとの交流の中で、私たちは早稲田大学は非常に自由な大学ということがわかった。例えば、正門や塀が無い、成績への規定要求が無い、学生サークルは3,000余りに達し、しかも大学の拘束を受けない、学生自治会が大学に反対する立場をとっている等々。中国の学生からすると非常に不思議だが、彼らとしては、これらはみな全く当然のことなのだ。その他に、教員に関するいくつかの事柄にも驚かされた。第一に早稲田の教員の給料は年齢で決定され、役職とは関係が無く、しかも研究経費も無いこと。第二は教員がいったん雇用されると、大学には解雇の権利はない、つまり終身雇用制だということだ。

私たち中国の教育体制は異なり、置かれている環境も異なるため、日本あるいは欧米の教育体制からそのまま学ぶことはできないのかも知れない。しかしいくつかの遅れをとっている点については考え、討論するに値すると思う。絶えず考えて積極的に取り組んでこそ、前進を続けることができるのである。

日 付：6月3日（月）9日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：徐晨琛

午前中に私たちはみずほ銀行を見学し、ここでは行員が2つの方面から銀行を紹介した。先ず銀行の業務および中国関連の状況で、その後、安倍内閣の経済政策を分析した。この全過程で銀行側は私たちのために丹念に中国語資料を用意していたことには、十分に同銀行のヒューマニティーが表れていた。紹介を通じて私はみずほ銀行について初歩的に理解し、そして安倍内閣の経済政策とその目的に対してある程度理解した。見学後、銀行側は豪華な昼食会を設けて私たちをもてなしてくれ、昼食の席では同銀行のスタッフと更に踏み込んだ交流をし、深い友情を結ぶことができた。

昼食の後、私たちは車で早稲田大学を訪れた。先ず大学のシンボルの建築を見学し、続いて大学の先生が私たちの質問に回答し、先生の口からは早稲田には教員評価基準が無く、早稲田に入りさえすればそれはつまり最も優秀だという話を聞いた。早稲田大学は学生に授業への出席を強制せず、最良のリソースを学生に提供している。これらの自由な学風は私たちには欠けているが、かといってすぐに実施できるわけでもない。私たちは自らの実情に基づいて、中国の国情に合った人材育成の道を模索しなければならない。説明会の後、私たちは早大の学生たちと討論を行い、自らの職業計画と少子高齢化社会という2つのテーマについて自分の観点を発表した。討論が終わった後、私たちは一緒に学内の古いレストランに行き、そこで思う存分語り合い、お互いに記念写真を撮り、すばらしい思い出を残した。

日 付：6月4日（火）10日目

大学名：清華大学

氏 名：劉丹陽

今日、最も感激したのは中国駐日大使館に見学に行き、そして大使と交流した事だ。私たちの思い描く大使館はこれまでずっと、とても神聖な場所だったが、今日実際行ってみてやはり印象深いものだった。郭団長は、もし東京に大地震が発生し、10%の家屋しか残らないとすれば、大使官邸はそのうちの一つだと仰っていた。これは大使の地位の重要性を十分物語っている。

そして歓談の際、大使は私たちに日本の経済、政治、文化などの面での基本的状況と中国との関係の発展過程を紹介し、また私たちに対して今回の旅行で日本をどのように見るか、どのような心持ちで学び考えるかについてもご自身の提案をして下さった。そして皆がいずれも非常に興味を持っている中日関係についても語られた。現在、中日双方が直面している障害は、一つは歴史的な問題であり、それには戦争に対する反省、慰安婦などが含まれる。もう一つはすなわち領土問題で、東シナ海の線引き区分と尖閣諸島の問題が含まれ、そしてこれらの問題を解決するには、双方が冷静に対話によって解決しなければならない。現在のような絶え間ない口論は問題の解決には全く無益で、したがってこれは政府の努力だけではなく、民間団体のより多くの意思疎通も必要とする。

実は大使に会う前、私たちは非常に緊張し、大使はとても近づき難く私たちもとても堅くなるだろうと思っていた。しかし実際に大使に会ったと実はとても気さくな方で、話し方も親しみやすく、急に郷里の親類に会ったような感覚になった。私はこのような駐日大使がいることは、日本の華人や華僑にとって本当に幸いなことだと感じた。

日 付：6月4日（火）10日目

大学名：中国農業大学

氏 名：聶車暢

「大使館交流編」

(1) 清華大: 治安が良い。機械化レベルが高い(ハウス食品工場の全自動化、人の手による検査と修理)、品質が良い(合格率、効率の高さ、40mm)、独占の予防(原材料は2社から調達)と共に材料元を確保。適時に設備検査・修理。

(2) 農業大: 先進的な科学技術の生産の細部への応用、節約と合理的な利用。工業と農業の関係では、工業の発展が農業の発展に貢献する。文化的覚醒: 自信、学習。

(3) 人民大: 有形と無形の細部から学ぶ。有形は技術。無形は管理の文化を賛同。

(4) 対外経済貿易大: キャンパス文化は多彩でしかも自律的。発展の道は責任を負った自由。

(5) 北外大: ヒューマニズされ、環境保護を追求。中国文化の伝播。

(6) 北京郵電大: 几帳面でまじめ(細かい気配りが出来、誠実—賈辰宇、ノートPCの修理保障、縁を丸く仕上げる)。

(7) 契約精神と信用; 道(茶、花、剣)の伝承。

大使は1973年に日本にきた新生中国が派遣した第1陣の日本留学生。中国と日本は「同文同種」の誤解を生み易く、「指向性」を持ち過ぎた比較は禁物で、むやみに卑下せず、むやみに尊大ぶらず、いかに自国、民族にとって有利かを考えれば良い。隣国、文化(相違点と共通点)、経済(ヨーロッパの近代産業文明)の戦後復興、中日関係: 政治、貿易(中国の対日投資の増大、海爾、華為、蘇寧)、人と文化の交流(500万人余り、200組余りの友好都市)、矛盾(靖国、歴史、領土と領海)

「日比谷松本楼編」

「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援する」孫文と梅屋庄吉の間の友情は非常に感動的だった。当初の約束を、一生涯かけて果たす、梅家氏の精神は尊敬させられる。生涯で一人の知己が得られれば、それで満足だ。

「ディズニーランド編」

文化的アミューズメントの感覚。

日 付: 6月4日(火) 10日目

大学名: 北京郵電大学

氏 名: 趙子蔚

昼の松本楼では泣きそうになるほど感動した。

午前に大使とお会いした後、松本楼で昼食を摂り、2008年に胡錦濤が訪れた同じ部屋で、小坂文乃さんが語る孫文と梅屋庄吉の友情に聞き入った。

孫文は辛亥革命を開始する以前に日本で梅屋庄吉と出会い、梅屋氏は孫文に「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援する」と約束したということを初めて知った。この誓いを彼は一生守った。孫文の最初の広州挙兵から、梅屋氏は多大な支持をし、最初の2回の革命はいずれも失敗したが、彼は誓いの言葉に背かず、孫文を励まし続けた。

孫文の逝去後、梅屋氏は大金を投じて4体の孫文銅像を鑄造し、中国に寄贈した。その後の両国は摩擦が絶えなかったが、梅屋氏は中日両国の友好促進の活動を止めることはなかった。梅屋氏は中国革命を支持したことで2度入獄したが、そのことを恨みも後悔もしなかった。最後には、日本政府と3回目の対中友好に関する商談に行く途中で、体力を使い果たし急死した。

大まかな記載によると、梅屋氏の革命期間における孫文への出資と援助は現在の価値で1,300億人民元を上回るという。2人はアジア独立という共通の夢で出会い、そしてこの友情を一生保ち続けた。これには本当に感動せざるを得なかった。その後、梅屋家の後代の人々も中国と密接な交流を保ち、中国の国家指導者からも手厚くもてなされており、それにはより感動させられた。先人の友情は私たちの世代でも絶えてはおらず、この称賛と感動に値する生死

の交わりが両国の友情に確かな基礎を築いているのである。

午後、私たちは私服に着替え、ディズニーランドに行き思い切り遊んだ。時間に余裕がなかったため、一つのスポットから次のスポットまでを、私たちは駆け足で移動した。行列の時間にも私たちは食べたり、写真を撮ったりした。私たちのグループはみなマントや帽子などを買い、交換しながら写真を撮り、心行くまで遊んだ。

今日は疲れて帰って来たが、それでも非常に楽しかった。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：清華大学

氏 名：饒聡

今日、私たちは新江東清掃工場を見学した。ゴミ処理は日本の大きな長所で、日本が誇るべき点でもある。

ゴミの無害化処理での最初の一步はゴミの分別をしっかりと行うことだ。日本ではゴミの分類が非常に細分化され、中国のように回収できる物とできない物を簡単に分けるだけではない。ホームステイの2日間で、私も彼らが飲料ボトルをきれいに洗い流し、ラベルを切り取ってからゴミ箱に捨てていることに気が付いた。豆乳の1リットル紙パックを、彼らは先ずきれいに水洗いし、また紙パックを切り裂いて体積を減らしてからゴミ箱に捨てるのである。説明によると、このように種類別に分類したゴミは、また統一の透明な袋に入れて家の近くの道路脇に置くと、清掃職員が運んで行くという。しかも日によって回収するゴミの種類が違うとのこと。この10日間の見学の中で、ディズニーランドがゴミをこのように細分していなかった以外には、大学キャンパス、観光名所、道路脇など他の場所のゴミ箱はいずれも4～5個あり、人々にゴミの分別を求めている。これは非常に面倒だが、しかし日本は土地が狭くゴミを捨てる場所が少ないため分類処理するしかなく、従って日本国民のゴミ分類意識は非常に高く、彼らは自覚的に、あるいはすでに習慣としてゴミの分別を行っている。

こうした分別があるからこそ、今日見学した新江東清掃工場は有効な無害化処理を行うことができる。無害化を実現するため、ゴミ焼却の温度は800℃以上に制御され、ダイオキシンなど有害ガスの分解が保証されている。ダイオキシンの発生は主にプラスチックの燃焼による。しかし日本では中国のプラスチック禁止令のようなポリ袋の有償使用の措置はない。プラスチック汚染の減少という点では、やはり中国の方法の方が良いのではないだろうか。

今日の見学で私は世界でも先進的なゴミ処理方法について理解したが、この点に関しては国民の意識、ゴミ処理の技術を含め、中国はまだ多くを学ばなければならない。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：中国農業大学

氏 名：趙未央

午前には新江東清掃工場の見学だった。見学はそれほど長い時間ではなかったが、私に深い印象を残した。ここでは日本の環境保護意識が十分に表されている。資源の分別搬入、分別焼却以外に、処理場のすべての可燃物はいずれも約1,000℃の高温下で焼却され、このような十分な焼却により、処理場ではダイオキシンなどの人体に有害な気体が発生することはない。ゴミ焼却余熱は火力発電に使用され、工場自体と周辺の施設に電力を供給している。このような科学的なゴミ処理方法は非常に賞賛に値する。

北京市朝陽区にも同様のゴミ処理施設があるが、ゴミの分別回収という考え方が中国では普及していないため、このような施設が中国で十分に運用できていないことは非常に残念だ。処理後のゴミは最終的に灰燼になり、埋め立てに利用される。このような方法は汚染を最小化することができる。昼食は東京湾の景観を眺めながらのビュッフェ料理で、台場の砲台の景色は非常に美しかった。

午後、私たちは有名な三鷹の森美術館を訪れた。宮崎駿は中国の子供たち誰もが知っているアニメーションの巨

匠だ。同氏の『千と千尋の神隠し』、『魔女の宅急便』、『紅の豚』、『天空の城ラピュタ』などは、皆良く知られている名作だ。

13:30に入館し、私たちは15分のアニメ短編映画を鑑賞したが、とても素晴らしかった。その後は記念品を買い求め、それから抹茶入りアイスクリームを食べた。

今晩は品川の中国式ビュッフェ料理で、今回の訪日での最後の夕食を締め括った。夕食後、私は渋谷109に行き、最後のショッピングをした。

日 付：6月5日（水） 11日目

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：陳亦行

中国と日本のゴミ処理における共通点と相違点

今日は新江東清掃工場を見学に行ったのだが、これは私が非常に期待していた見学だった。なぜなら私は以前北京でゴミ分別処理の調査研究を行い、北京のゴミ中継ステーションと朝陽区総合ゴミ処理場を見学したことがあるからだ。

全体的に見ると、処理場の処理機能にはほとんど違いがなく、いずれもゴミの堆積量減少を優先し、その次にはゴミの資源化である。その「総合性」例えば堆肥機能、金属回収、有害有毒物質処理などは両国の大型処理場の中にいずれも表されている。しかし中国のゴミ分別は日本に遠く及ばないため、いわゆる「可燃ゴミ」の中に大量の夾雑物が混ざり、湿度が高く、石炭を加えなければ高温燃焼ができない。またいわゆる「生ゴミ」堆肥は、中国ではしばしば食べ残しの料理をこの種類に入れているが、実際には堆肥に使われるゴミは油と塩分を含んでいてはならない。したがって中国のゴミ処理はコストが高く、効率が低い。

ゴミ処理を十分に行うには私たちはやはり「ゴミを減らす」道を模索しなければならず、これは中国も日本も考えなければならない問題である。

宮崎駿の世界

午後の三鷹の森ジブリ美術館の見学では本当にすっかり心を奪われた。さほど大きくない館内には、世界で最も感動的な手描きアニメーション映画誕生の記録が再現されている。この手描きによるアニメーション造りにこだわるおじいさんは、長い期間創作を続け、同時に非常に多くの本を読むことで、「普段から絶えず新たな知識を得て、それを自身の生活に活かす」事を実践している。宮崎おじいさんは止まることなく新たな能力を汲み取り、絶えず自らの想像を発信している。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：中国人民大学

氏 名：楊暢

12日間の素晴らしいおとぎ話のような日程は間もなく幕を閉じようとしている。そして機内でこの日記を書き終えたこの時、私の心の中では、一つひとつのシーンが映画のように浮かんでは消え、皆のそれぞれの笑顔が私の眼前に現れ、私の胸の中にはすでにこの国とこの国の人々に対する感謝の気持ちが満ち溢れていた。

便器の便座さえも暖かくし、細部と笑顔を極限にまで成し遂げる国が、どうして好まれないことがあるだろうか。

全行程で私たちをもてなし随行してくれたスタッフの方々、先生や学友たちから、私たちが道を尋ねると親切に答えてくれた日本の方々、ホームステイ先の家族の心を尽くしたもてなしから、ディズニーランドのスタッフの親身な手助けまで…これらすべてが私にこの国の魅力を深く感じさせてくれ、またほんの少しではあるが彼らの生活を知ることがで

き、一般の人々の生活や考え方に触れたことにより、戦後この国が急速に台頭した理由の一部が理解できた。

「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある。」私の心の中は感謝とたくさんの思いで満たされている。同時に私たちは、とこしえの中日友好というのは冗談ではなく、心から期待できることだということを確信した。次世代の人間として私たちの責任はとても重いため、自らが担う責任をよりはっきりと認識しなければならない。

すべての感情を集めた私のキーワードは、感謝。

縁があり出会うことのできた皆さん一人ひとりに感謝。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：李家聖

今日は日本での最後の日だ。

最後の日ではあるが、やはり私たちは予定にしたがってホテルニューオータニのゴミ処理システムを入念に見学した。表向き華麗なものでも、その中にはやはり地道に努力をしている部分があり、ホテルニューオータニのスタッフたちの日頃の努力が豪華なニューオータニを作り上げているのだ。

昼には、日本側が私たちのために歓送会を催してくれ、これまで見学で訪問した企業、大学とホームステイ先の家庭から代表者が参加した。これには私たちは感動させられただけでなく、永遠にこの友情を心に刻もうと思った。しかし大使館の代表が発言で述べていたように、「私たちは今回の旅を私たち自身の素晴らしい思い出にするだけでなく、それ以上に私たちが見聞き感じたことを国内の同胞に伝えなければならない」。

そうだ、友情は生来備わった物ではなく、双方が互いのために努力をしてこそ、初めて作り上げることができるのだ。

中日両国は互いに永遠の隣国であり、双方の関係を良好にすることは世界の大勢にとってのニーズであり、中日両国民の願いでもある。私たち大学生はこのために自分の力を捧げたい。

「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある！」

私たちはその準備ができている！

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：邱歆与

今日はついに帰国の日、多少の興奮と名残惜しさがある。朝、私たちは宿泊先のホテルニューオータニのローズガーデンを見学した。ここは多くのカップルが結婚式を行う場所だ。ここはビルの屋上にあり、一面のバラが無限のロマンスを感じさせ、またこのような屋上の利用方法は実に創意的だと感慨を覚えた。その後、私たちはホテルニューオータニの地下にあるホテル全体の管理施設を見学した。管理部門全体がすべて省エネとリサイクルの理念により、これまで見学した企業と同じくエネルギーと汚染排出の削減に尽力している。間もなく帰国するが、日本の企業は本当に私にとっても多くの感慨を残した。その中で最も感慨深いものは企業の社会的責任感だ。今回の中国大学生の訪日の旅を含め、日本の企業が自らの利益を持ち出して再び社会に還元しているからこそ、私たちは今回の貴重な日本訪問で、中日の友情を促進することができるのだ。私はこのような社会的責任感、調和のとれた社会における企業にとって不可欠なものだと思う。12日間の日本訪問の旅は間もなく幕を閉じるが、この美しい環境の国を去るのは本当にとても名残惜しく、それ以上に名残惜しいのは毎日と一緒に過ごした仲間たちで、異なる学校、異なる組織から来た人々がこのイベントによって一緒に集まったのだが、これは本当に不思議な縁だった。私は帰国後もきっと仲間たちを、そして日本で一緒に過ごしたこの12日間を懐かしむことと思う。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：楊寧

今日は日本訪問の最終日だが、この12日間には多くの感慨があり、日本に来る以前と日本から北京に戻る時の日本に対する印象は完全に異なっている。以前の日本に対する理解の手段は新聞、書籍、ネットなどに限られていたが、今回自らの体験を通じてやっと日本に対する基本的な理解を得ることができた。もちろん今回の日本の旅は、これまでの私の日本に対する印象も覆した。それでも私たちは自分を卑下したり、また傲慢になってはならない。中国が日本に学ばなければならない面はたくさんあり、今回は多くの企業と2つの名門大学を訪問したが、確かに考えさせられる点が多々あった。ホームステイ先の福島さんご一家には特に感謝している。ホームステイの時には私を家族同様に扱って下さり、彼らとの触れ合いの中で私は日本の一般の家庭生活を体験し、また70～80年代の北京の様子をいくつか知る事ができた。そして今日のとある一言に私は感動させられた。それは「真の友人を得るためなら、どれだけ歩くことにも価値がある。」という言葉である。私たちは遠路はるばる北京から日本に来て、ホームステイ先の家庭の皆さんと友達になり、また関さんと知り合いになった。この12日間の日程の中で、関さんは一生懸命私たちの世話をして下さいました。また呂さんもとたいへん仕事熱心で、こんなに多くの素晴らしい友人と知り合いになり、私たちの今回の旅は素晴らしいものだった。

機会があれば外に出掛け、これまで見たことのない世界を見てみるべきである。この12日間の時間は短かったが、私の一生の思い出となった。親愛なる友人たちに別れを告げるのは名残惜しいが、人生の中では誰も一生付き添うことはないのも分かっている。だからたとえ私たちが別れを告げても、この友情がずっと続き、中日両国間が代々友好的に平和共存できることを望んでいる。

日 付：6月6日（木） 12日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：胡承蓉

今日は日程の最終日、午前、ホテルニューオータニのエコセンターの見学を終えた後、皆は荷物の整理を始めたが、ホテルを出る際には、多少残念な気持ちになっていた。私たちの中には沢山の収穫が得られた人がいれば、そうでない人もいたが、いずれにしても今回の訪日活動は、私が今まで参加した中で最も有意義な活動であったと言える。

朝、私たちはホテルニューオータニの環境保護・省エネ作業の見学に行った。回収したゴミの分別を実施し、脱水処理後に生まれる肥料は、引続き循環使用できるというエコロジーで効率的なものであった。

歓送会では、皆が二列に並びホームステイ先の家族、企業、大使館、学校の代表など続々訪れたゲストの方々を出迎え、中国人学生達の熱意と感謝の意を表した。会場を訪れた多くのゲストを目にし、私たちがこの12日間の間にこれほど多くの場所を訪問していたのだと感じ、もしこの12日間で学び得たことをまとめたら、それはきっと素晴らしいものになるだろうと思った。各代表者の挨拶、参加6学校の報告と演目の上演後、私たちはすべての訪問活動を終え、旅行日程が円満に終了した。ホームステイ先の家族との別れの時、私たちは中国、日本に関わらず、必ず再会することを約束した。

バスの中では、昨日に比べて、皆の感動はより深いものになっていた。特に郭団長の挨拶は、その心からの思いが溢れ、私たちにより強く今回の訪日活動の意義を実感させた。この12日間の交流を通じて、私たちは日本の技術・文化・生活等の様々な方面について身をもって体験することができ、まさに百聞は一見に如かずであった。私たちは、それらを記録するだけでなく、今回の活動での収穫をより多くの人々に伝えていくことがより重要である。訪日団内の学生・教師間にも深い友情が築かれ、今後お互いに頻繁に連絡をとるかどうかに関わらず、お互いの心の中に皆、美しい思い出を刻んだのである。中日友好協会が私たちのためにこのような貴重な訪日の機会を与えてくれたことに感謝すると共に、団長、関さん、呂さん、潘林さん、夢妍さん達のこれまでの私たちへのお世話に感謝し、私はこれから、今回の訪日活動の収穫をしっかりと心に刻み、そして人々に伝えることを自分の大切な使命としたいと思う。そして私たちの友情が長く続くことを願っている。

学生たちの撮った写真



日本到着

関西国際空港に到着し一安心。派手な団服(ユニフォーム)の一群は人目をひく。夕食をすませた後で京都に向かいます。



島津製作所

四川大地震の際に寄贈され、診断医療に活躍した移動式X線装置の紹介に熱心に聴き入ります。



京都大学①

「走近日企」大学生訪日では初の訪問が実現。京大挙げての熱烈歓迎でした。



京都大学②

京都府副知事も駆けつけてくれた交流会。歌での交歓もあり一気に親しく。



静岡県農林技術研究所・農林大学校
温室栽培の特徴に熱心に聞き入る。
流通と市場、後継者問題などに関心。



ハウス食品

レトルトカレーの製造現場を見学。
自動化ラインの凄さに感動。



テルモメディカルプラネックス
モニターに聴診器を当てたり、注射をしてみても、人に優しい医療器具開発の現場を実感。



住友商事
総合商社について学習。住友グループ「白水会」の由来、中国との深い縁に感嘆しきり。



三井化学
化学工場の安全問題は中国では大きな関心事項。説明役の王果さんと中国語での丁々発止のやり取りが続きます。



新日鐵住金
唯一の写真撮影ができる4号高炉をバックに、見学者用ジャンパーとヘルメットが青空に映えます。



みずほコーポレート銀行
アベノミクスと日本経済についての紹介では熱心に聴き入っていました。



早稲田大学
これが早稲田大学かという感慨を胸に記念撮影。大隈講堂をはじめキャンパス内を見学。



早稲田大学②

白木ゼミ生との交流の後で懇親会。若者同士ですぐに仲良くなります。



中国大使館

中国大使館で仰ぐ国旗には特別の感慨。程永華大使が長時間にわたり会見に応じてくれました。



日比谷松本楼

孫文・宋慶齡と支援者梅屋庄吉の交流について、梅屋庄吉の曾孫の小坂文乃さんからお話を聴きました。



新江東清掃工場

経済活動と社会生活・環境との関わりについて、ごみ処理、熱エネルギーでの回収の実態を見学。



ニューオータニエコセンター

ローズガーデンの見事さと地下室で処理する中水利用、遮熱効果など大型老舗ホテルの最先端のエコ取組みに感心しきり。



歓送会

受入企業・ホストファミリー・大学生、日中経協役職員で記念撮影。長いような短いような12日間、去来する思い出を胸に成田から帰国の途につきます。

ホームステイ



ホームステイ1

日中経協事務所の前での記念撮影。
男子学生を4人も引き受けて頂き、果たしてどんなホームステイに？



ホームステイ2

自宅玄関で揃っての記念写真。一家揃って都内の見学に出かけます。



ホームステイ3

浅草寺に御参り。アットホームな雰囲気になったことが良く現れています。



ホームステイ4

ちょっと恥ずかしいけれど、ピースサインが打ち解けた雰囲気を表しています。



ホームステイ5

すっかり懐いた子供たち。帰る日もみんなで見送りに来てくれました。



ホームステイ6

赤ちゃんも一緒に浅草、お台場など色んなところに案内してくれました。

日本点描



京都嵐山で周恩来総理を記念して建立された「雨中嵐山」の石碑に詣出ました。
小雨に洗われ緑の濃淡が鮮やか。



高台寺月真院で浄因住職から日中茶道交流の話を伺い、表千家の茶道を体験してから座禅まで。精神文化を実感。



京都から浜松までは新幹線での移動。
千年古都から一気に最新技術、快適さとスピードを実感し感動。



箱根湯本の天成園では浴衣と羽織を着て温泉と食の文化を満喫。懇親会ではみんな打ち解け仲良くなりました。



なんでも見たい、聞きたい、触りたい。夜は街に繰り出して可愛くタコ焼きも貴重な体験。



憧れのTDL。童心にかえっても求めるのは「刺激」溢れるアトラクション。30周年記念イベントも観られて大満足。